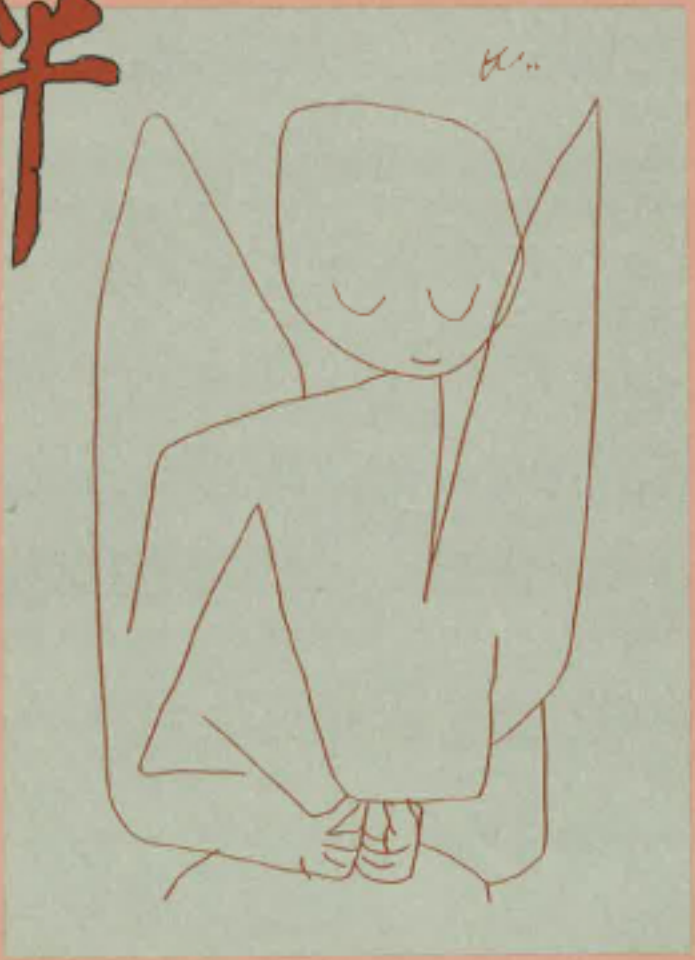
書評

1985.9.30
第75号

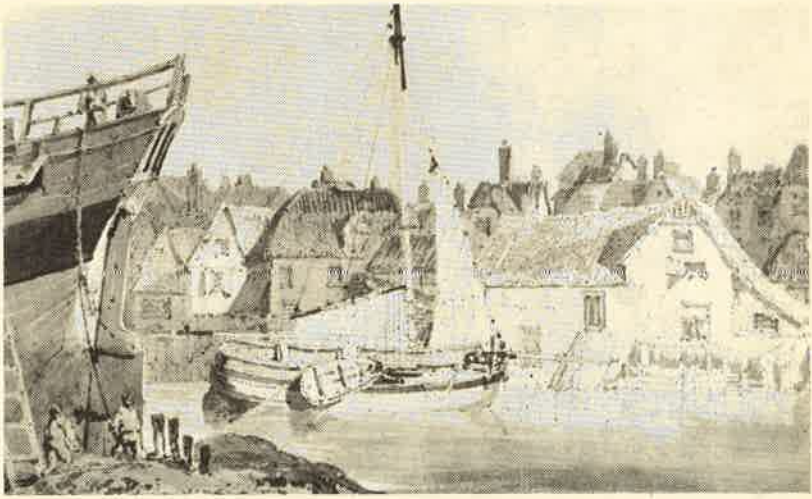
書評編集委員会



書評 75号(9月号)目　次

新刊紹介	アフター・マルクス D・マクレラン著／重田晃一・松岡　保・若森章孝・小池　渺訳	松岡　保	4
投　稿	中国語と『母国語の干渉』	西川　和男	12
連　載	聞き書き・部落に生きる人たち⑧ 闘って勝利する喜びを	田宮　武	23
	研究余滴・ヴェルレーヌ 1 ヴェルレーヌの位置	山村　嘉己	59
	日本中国ことばの来往 その21	芝田　稔	67
	羅　針　盤		2
	お知らせ		71
	編集後記		72

'85.9　羅針盤



「人は女に生まれない、女になるのだ」このあまりにも有名な一文を掲げて出版された「第二の性」は、当時――つまり36年前のフランスでいや全世界で――大きな波紋を呼びおこした。帝国主義の市場分割戦が終了した直後、戦争遂行を支えるためとはいえ近代国家のなかで初めて女性が層として社会的任務を持ち、形成されつつあった社会的存在としての自覚が急速に解体され再び他のどんなこととも緊張感をもたない〝女〟としての役割のなかに包摂されつつあった時期である。この著作はしかし既存の女権拡張運動に不満をもちながらも運動としては組織されずにいたひとにぎりのフェミニスト達にとって、アリスシュヴァルツァーの言葉を借りれば、「シモーヌ・ド・ボーボワールという人間、彼女の人生と作品のすべてはひとつの象徴であったし、いまなおそうである。（略）女性も偏見や慣習をのりこえて自分の人生を決めていくことができるという可能性を象徴していた。」のであった。この時以来、彼女は世界中のあらゆる階層の女性から圧倒的な反響を受ける。

しかしその一方、思いもよらぬ人々から――左翼、共産主義者、トロッキストと呼ばれる人々から――決定的な批判を受ける。曰く「女性問題とはフィクションである！」又これまで文学上の親交関係をもっていた何人か

の友人達からも手痛い偏見と断絶の言葉を送られる。

彼女がこうした批判に対して逐一どのような態度をとってきたのかは、最近日本語版で青山館から出版された「第二の性その後――ボーボワール対談集'72～'82」においても詳しい言及はされていないが、サルトルとの共同インタビューのなかで、ボーボワールは彼女の人生観、フェミニズムについての態度と確信を考察するうえで極めて興味深い発言を行っている。例えば「第二の性」執筆時、彼女は全面的にサルトルに養われていた。人々はこれをみて隷属と決めつけるかもしれない、しかし彼女には一切のこだわりはない。「当時、彼はお金があり、私にはなかった。それだけのことです」とこともなげに彼女は語っている。又一方で「私の人生で一番大きな出来事はサルトルとの出会いである」とも言い切っている。確かにサルトルとの出会いがなければ、中産階級的な結婚を夢見ていた少女の思想的な転換の契機は訪ずれなかったかもしれない。がやはりここでも重要なことは、転換の契機が何によってもたらされたかではなく、その後の彼女が克ち得つづけてきたもの、拡がりつづける好奇心、思想的確信、精神的な自由と経済的自活の条件、その持続とサルトルとのたえざる緊張感に裏付けされた信頼と愛情等々が重要なのである。又この「――対談集'72～'82」では〝未来や社会主義を漠然と信頼するところ〟でとどまっていた「第二の性」執筆時から、'68年5月革命を経て組織された女性解放運動グループへの実践的な関わりの中から紡ぎだされた思想的な転換の過程が鮮かに展開されている。

'72年には彼女は階級闘争とは連関しながらも女性独自の解放をかけた闘いの必要性を強調し、その意味で私はフェミニストだときっぱり断言している。そして彼女はフランスM・L・Fを初めとする多くのグループとの接触・共同闘争を通じて今日の女性解放運動が陥りやすい過ちに対して警告を発している。例えば〝女性が自分の肉体や妊娠や月経をもはや恥じないのはいいことです。（略）しかし、それ自体から価値をつくり出すべきではなく、女性のからだが女性に新しい世界観を与えるなどと信じてはなりません。こんな考えは（略）女性をますます抑圧し、知識や権力からますます遠ざけることのできる男性のゲームをしているのです〟。又かつての彼女のようなエリート女性、つまり男性にとって「アリバイ」となる女性であることを現在のフェミニスト達が拒否していることを「正しい」と評価している。彼女は労働者ではなく基本的にはインテリゲンチャとして闘い生きてきたがゆえに現在のような確信と洞察力を獲得してきた。そのこと自体は良くも悪くも彼女の可能性でありかつまた限界でもあるだろう。

—新刊紹介—

『アフター・マルクス』

D・マクレラン 著

（重田晃一・松岡 保 若森章孝・小池 渺 訳 新評論社 一九八五年）

松岡 保

(一)

マルクス自身やマルクス以後のマルクス主義にたいする一般的な——とくに学生諸君の——興味と関心は、近来、つとに冷えこんでしまったようである。

『資本論』第一巻の刊行百年が祝われた一九六七年ごろには、いまだ決してそうではなかった。『資本論』は、「宇野理論」への賛否も含めて、学生諸君にも読まれていたし、スターリン批判以後の流れの中で、トロツキーを筆頭に、毛沢東、チェ・ゲバラからマルクーゼと、さまざまな「マルクス主義者」の著作が、正統・異端論争を伴いながら、熱心に論じられ、人々を魅きつけていた。「造反有理」といったスローガンに象徴されるように、「大学闘争」や七〇年安保闘争は、マルクスの系統を引くと考えられてきた人々の言葉や思想を用いながら、争われ戦われもした。「新左翼」は、反スターリン主義ではあっても反マルクス主義ではなく、むしろ異端とされてきた思想の中に、マルクスの真髄や正統を認めようとするものであった。

しかし、その後十余年、マルクス死後百年の一九八三年には、もはやそうしたマルクスとマルクス主義にたいする熱気は、一般には認められない。死後百年を記念して、マルクスに関するさまざまな研究、論文は、もちろ

ん数多く出たし、特集にもこと欠かなかったものの、マルクスなりマルクス主義が、現在の世界の――とくに日本の――課題や問題を解決する上で、直接導きの星となるといった切実さは、書き手にも読み手にも無縁である。マルクスもマルクス主義も、やはりあくまで過去の、歴史的存在であり、それらから、改めてなにを学び、生かすことができるのか、あるいはまた、それらが如何なる歴史的意味をもつものであったのかは問われても、それらが現在の課題や問題を、直接、それだけで解いてくれる鍵であるとは、考えられていない。

そして、一般の学生諸君においては、より一層そうであり、マルクスもマルクス主義も、世界史上の数多くの思想家や諸思想、たとえばジョン・ロックやアダム・スミス、あるいはカントやヘーゲルとおなじく、学説史、思想史上の存在ではあっても、自分に直接かかわるものではない。多少とも前述の人々との差があるとすれば、「社会主義」と関係があるかぎり、遠ざけ、触れぬが無難というところであろうか。

こうした風潮を生みだした原因は、もちろんさまざまである。一方では、いわゆる「社会主義国」の現実にたいする失望が、その対立、抗争から抑圧も含めて広まらざるをえなかったし、他方では、「経済大国」日本へのうぬぼれ――「中流意識」――と安堵、あるいはその状態へのあきらめが進みもした。マルクス以後の世界の変化を、どれだけマルクスなりマルクス主義がとらえているのかの反省も、起らざるを得なかった。

ただ、賛否いずれにせよ、マルクス死後の百年が、マルクスとマルクス主義抜きでは理解できないことも事実であり、われわれが現在の位相を見極めるためには、マルクス以後のマルクス主義の在り方について、一定の知識と認識をもつことの必要性は、依然として変らないというべきであろう。見方によっては、一面的な信奉でもなく、あるいはその裏返し的な一面的な悪罵でもなく、

また、権威と結びついた正統とか、それへの反抗としての異端とかいった視角からでもなく、各々その意味と問題をもった一つの事実として、一つの思想的存在として、マルクス主義の諸系譜をとらえることが、そうした変化の中で可能ともなったし、より一層必要ともなったといっても良い。

そして、その点で、以下に紹介するD・マクレランの『アフター・マルクス』は、極めて興味ぶかいし、有益でもある。というのは、本書は、その一連のマルクス研究によって定評ある著者が、マルクスをこえて、彼の死後、現在にいたる約百年におよぶマルクス主義の「多種多様の亜種」を、そうした視角から描きだそうと試みたものであるからであり、「マルクス主義学説全体の進化」や、マルクス主義の「特定の思想家」に興味をもつ読者に、いずれにせよ念頭におくべき「基礎的な情報を提供」しようとしているからである。換言すれば、マルクス主義について考えるさい――全体的にも個別的にも――本書でのべられているような諸系譜、諸問題を無視することは、いまや不可能なのであり、逆に、それらによって、マルクス主義の諸側面に、興味と関心を新たにすることもありうるように思われるのである。

(二)

ここで、著者マクレランについて一言すれば、著者は一九四〇年、イギリスに生まれ、オックスフォード大学を出て、現在、カンタベリーのケント大学の教授である。すでに、一九六九年の『青年ヘーゲル派とカール・マルクス』(宮本十蔵訳『マルクス思想の形成』ミネルヴァ書房、一九七一年)、『マルクス主義以前のマルクス』一九七〇年(西牟田久雄訳、勁草書房、一九七二年)といった青年ヘーゲル派と若きマルクスの関係をとり扱った彼のデビュー作から、いちはやく翻訳されてきたし、その後、彼の手がけた浩瀚な『カール・マルクス――生活と思想――』は、西ヨーロッパにおける「マルクス学」の立場からする代表的な成果として、各国で訳された(杉原・重田・松岡・細見訳『マルクス伝』ミネルヴァ書房、一九七六年)最近のもっとも包括的な伝記といえるこの『マルクス伝』は、「讃仰と悪罵との両極端を避けて、同情的批判の立場」に立って書かれており、「読者に適正なバランスをもったマルクス伝を提供すること」を目ざしているが、この立場は、『アフター・マルクス』においても、おなじである。

そして、そのほか、マクレランはマルクスの『初期著

作集』『経済学批判要綱』『マルクス選集』などの抄訳編集をもおこない、近来、イギリス等で大学のカリキュラムにとり入れられ、その重要な対象となっているマルクスとマルクス主義への一般的な理解の深化を助けてきたが、さらに時代的にも空間的にも対象を広げ、そのなかでマルクスをとりあつかったのが、本書『アフター・マルクス』である。原題は、「マルクス以後のマルクス主義(Marxism after Marx)」(一九七九年)で、著者の『マルクス主義以前のマルクス』と対をなし、『マルクス伝』とともに三部作をなすといってよい。

(三)

さて、本書はその原題どおり、マルクス死後百年にわたるマルクス主義の思想史を描きだそうと試みたものである。著者ものべているように、その間、「マルクス主義は多種多様の亜種に分化」してきており、それらを総括的に展望することは、対象の範囲からいっても容易ではない。さらに、それらを各々、どのように評価し位置づけるかについては、さまざまな立場が考えられよう。かつては――そして今でも一部では?――党の主導権、権力の掌握を中心に、マルクス=エンゲルス=レーニン=スターリン、さらには毛沢東その他を正統としてイコールでつなぎ、正統に対する異端の対立、前者の正しさと後者の誤りという形で整理されたこともあった。しかし、これは、もちろんマクレランの採るところではない。彼は、ドイツ社会民主党からはじまって、ロシア・マルクス主義、両大戦間のヨーロッパ・マルクス主義(ルカーチ、コルシュ、グラムシ等)、中国革命と毛沢東、ラテン・アメリカ等の低開発国のマルクス主義、フランクフルト学派から実存主義的マルクス主義、構造主義、アメリカにおける新左翼にいたるまで、広く各国、各派にわたって、政治的なものにかぎることなく、さまざまなマル

クス主義の発展の相をさぐっている。すなわち、彼は、大衆運動や権力の掌握と結びつくことができた国ぐににおける、その指導的思想としてのマルクス主義だけでなく、また、その間にそれらと対立して、異端として排除されたマルクス主義だけでなく、ついに大衆運動や権力の掌握と直接結びつくことなく、むしろ最後には「政治」的変革を第二義的と考えるにいたる思想や「知的傾向」をも、等しくその対象として扱っている。フランクフルト学派はもちろん、「実存主義的マルクス主義」として、サルトルについてもかなりなページが割かれているのであって、その対象とする範囲は、マルクス主義の運動史ではなく思想史たるべく、きわめて広い。

それゆえ、本書で扱われているマルクス主義は、政治史、運動史との関係では、濃淡さまざまであるが、それらはいずれも、マルクス主義の「多種多様の亜種」として、描かれている。そこには、マルクス主義を、確固不動の学説体系とみるのではなく、多種多様の亜種を生みだして当然なものとしてとらえるマクレランの基本的立場があらわれているのであるが、それというのも、彼は、その分化の源がマルクスの思想自体に存在すると考えるからである。

すなわち、マクレランは、マルクスの思想は、簡単な定式におさまるものではなく、常に肯定と否定——相反する価値・感情の対立・両存する「両義性」(ambivalence)——をはらむものであったし、また彼の死後の展開のなかで、ますますそう解されるざるをえないものであったと考える。その詳しい理由は、序章「マルクスの遺産」でのべられているが、多少言葉を変えて、わたくしなりの感じでいえば、マルクスの遺産がいかに「偉大な遺産」であったにせよ、それが生きた思想として在ったかぎりは、そして、弁証法的にして無限志向的であったかぎりは、そうならざるをえなかったのである。さらに、一方で大衆運動や権力の掌握と結びつき、思想の

「実現」に成功するとき、それは、具体的な歴史的状況や伝統と結びつくことができたために成功すると同時に、それらを通じて特殊化もすれば教理化もする。他方で、権力や政治と直接関係することなく、いわば自由、奔放に遺産が展開され、生かされるとき、非マルクス主義的な諸思想との接触、摂取をともなって、それは極めて示唆的、普遍的な思想たりうるけれども、同時に、ともすれば観念的なものたらざるをえない。このように考えられるかぎり、ことはマルクス主義にかぎらず、より一般的に、生きた思想、主体的な思想が発展する現実に対応するときに生じるそのもろもろの方向と可能性や、思想の継承と創造の問題にかかわっているともいえるのであり、思想なるものの本質的な問題をも、考えさせるのである。ともあれ、こうした両義性を本来的にもつものとして、マルクスの遺産とマルクス主義の思想がとらえられていることに、本書の一つの特徴がある。

もちろん、そこから生じたマルクス主義の「多種多様な亜種」にたいして、本書はまったくおなじ態度や評価をしめしているわけではない。一例をあげれば、ロシアが一国社会主義を強いられた状況については一応の理解をしめしても、それを正統化するためのスターリンの「理論的な新しい考案」にたいしては冷笑的である。中国

書評編集委員募集!!

『書評』を自分の手で創ってみませんか?

☆雑誌の編集に興味のある方。
☆思想・文化運動をやってみたいと思う方。
お気軽に編集委員まで。

・連絡先　生協本館3F・組織部内
☎387-9998（直通）
☎388-1121（内線4821）

共産党がプロレタリアートを代行せざるをえなかったゆえんについては、理解をしめしつつ説明しても、さりとて民衆にたいする党の権威主義的、家父長制的な関係にたいしては同感はしめされない。哲学面でも、エンゲルスによるマルクス主義の自然科学論的な体系化の試みや、レーニンの『唯物論と経験批判論』の生じた事情や背景は、ある程度止むをえなかったこととして好意的に描かれるけれども、内容的にはほとんど一顧もされない。反対に、主体と客体、理論と実践の緊張をはらんだ、ヘーゲル弁証法につらなるレーニンの『哲学ノート』やルカーチの『歴史と階級意識』にたいしては、マルクス主義の出発点をとらえなおしたものとして、高い評価があたえられている。

とはいえ、本書はさまざまな傾向と主張を吟味するさい、それらの批判を通してより正統的なものへ導いてゆくという態度ではない。あくまでも、それらのよってきたる背景や、そこに存在する問題を理解させ説明することが主であって、批判のばあいにも、一定の距離をおいた「同情的批判」が中心であることは、すでにのべたとおりであり、『マルクス伝』のばあいと同様である。

それゆえ、本書にたいして、『マルクス伝』同様、著者とマルクス主義の諸思想との直接的対立でない点に、物足りなさや異論を感じることも、ありえよう。また、「マルクス主義の遺産にそなわっていた両義性が、マルクスの後継者たちによって実にその最大限まで究めつくされた」とまで結論することに、留保をつけ、マルクスの再発見や現状批判の立脚点の可能性をもとめたい面も存在する。ただ、現実に多種多様な形をとり、定着もすれば同化もし、体制化もすれば観念化もしてきたマルクス主義の発展の諸相を、正統対異端でも、讃仰対悪罵でもなく、ともかくも各々、そうしたものとして包括的に展望することは、マルクスに依拠するにせよ、超えるにせよ、あるいは離れるにせよ、やはり必要であり、本書はそのために有意義なのである。すでに試みられ、繰りかえされたことを知らずして、独自性を誇示するのが滑稽であり悲劇でもあれば、逆に、先人の試みの中に示唆と励ましを見いだすときとてあろう。

(四)

最後に付け加えれば、残念ながら本書では、日本におけるマルクス主義思想史の叙述は欠けている。本書が包括的なものだけに、そして、著者の目には日本のマルクス主義思想史はどのようなものに映るかは、これまた興味ぶかいだけに、この欠落は、たしかに大きく物足りない点

の一つである。

大体、本書は、マクレラン自身の独自な、専門的研究にすべてが依るのではなく、個々の問題にあたっては、当該テーマにかんする西欧の研究文献に依拠しているのであって、それらを通じて、西欧における個々の研究の広さと高さ、そしてマクレランの巧みな処理をうかがわせている。その点からいえば、日本についての叙述の欠除は、未だ著者が利用しうる西欧文献の欠除――西欧における日本研究の問題点――と言語の壁とを感じさせざるをえない。その突破は、今後の課題となろう。

ただ、それなら日本のマルクス主義思想史について、本書の一章に位置するような邦訳文献として、なにを想起できるかとなると、わたくし自身の不勉強もあって、困惑せざるをえない。本書のように一人の手になるものや、あるいは全集、講座の形をとったもので、各々特徴あるものは存在するものの、本書のように幅広く、かつバランスのとれた全体的展望をあたえているものとなると、やはり疑問である。そうした意味でも、本書は、やはり数すくない類のものであり、独自の価値をもつものであることを感じさせるのである。

（まつおか　たもつ・経済学部教員）

（付記　本稿は『アフター・マルクス』に付せられた「訳者解説」をもとに、それに手を加えたものである。）

―投　稿―

中国語と『母国語の干渉』

西川和男

一、はじめに

外国語学習の最大のネックとなるものは『母国語の干渉』であるということは従来より指摘のあるところである。(註) また、この『母国語の干渉』ということが最も顕著にみられるのは、日文中訳に於いてである。しかし、これまで各教授者がそれぞれの経験に基いて、各自独特なやり方で以って断片的に授業に於いて学習者に注意を促すことはあっても、この問題を中心にすえた角度からの教授はあまりなされて来なかった。又、この『母国語の干渉』ということを主眼にして、日本人学習者のためのテキストも編まれて来なかったように思われる。現に本稿で取り上げた例題が示す如く、相当学習の進んだ上級レベルの学習者ですらも共通して犯す誤りは、逆にこの「落し穴」に関しての十分な指摘がなされなかったことの証左に他ならない。

本稿では、『母国語の干渉』ということを中心に、筆者が実際の中国語教授の場で観察した日本人中国語学習者が犯し易い誤りを指摘し、日文中訳での誤訳を避けるための一助ともなればという主旨で、実例を挙げ分析を加えようとするものである。

尚、資料としては、実際に書かれたものをベースに、不必要な要素を省いた文を用いたが、誤用ということに関しては、中国人インフォーマントの意見の一致を見たもののみを挙げることにした。

二、『母国語の干渉』の例

『母国語の干渉』の例は、(I)――語彙レベルに関するもの、(II)――語法レベルに関するもの、の二つに分けることができる。もっとも、両方にまたがり、明確に分類できないものもある。(×は誤訳、○は正しい訳を示すものとする。)

(I) 語彙レベルに関するもの

①「彼は本社へ行きました。」

×他到本公司去了。

中国語の〈本公司〉は日本語では「当社」という意味で、「本社・支社」という場合は〈総公司・分公司〉を用いる。

○他到総公司去了。

②「今はそんな事を言っている場合じゃない。」

×現在不是説那種話的場合。

中国語の〈場合〉は日本語を輸入したものであるが、日本語の「場合」とはかなり意味のズレがある。中国語の〈場合〉には、「場面・場所」という意味にも用いられ、〈在公共場合、要遵守秩序＝公共の場では秩序を守らねばならない。〉というような使い方をする。また、「そんな場合、どうしますか＝那様、你怎麽辦？」と「場合」にあたる言葉を用いない方が、より中国語らしい表現となる。従って、この「場合」を中国語に訳すときは、注意が必要である。一般に「～の場合」を訳すときは、〈～的時候〉や〈～的話〉を用いる。

○現在不是説那種話的時候。

③「卒業したら、私は教師になりたい。」

×畢業以後、我要成教師。

職業とか、～の役を務めるという意味の「～になる」は、〈当〉を用いて、〈当兵＝兵隊になる〉、〈当主席＝主席になる〉などとなる。〈成〉はそういう状態に変化することを言うのであるから、例えば元工場労働者であった人が「教師になった」というときには、〈成〉は使える。従って、例文のような場合は、〈当〉を用いなければならない。

○畢業以後、我要当教師。

④「今からすぐ行きます。」

×従現在就走。

中国語の〈現在〉には、「いま」という意味と、更に「今から」「これから」という意味も含まれ、日本語の「現在」とは必ずしも一致しているわけでもない。従って、「今から考えると……」という場合も、〈現在想起来……〉となる。

○現在就走。

⑤「目的に達した。」

×到達了目的。

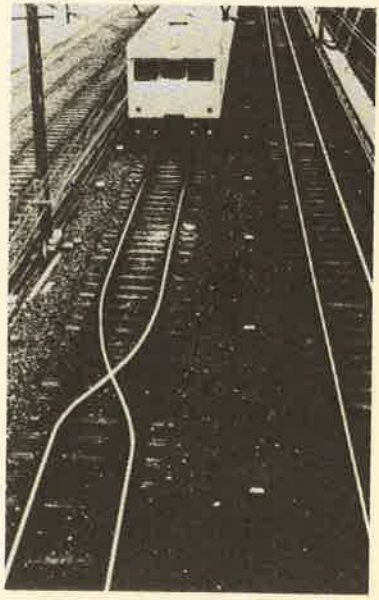
「目的地に達した。」

×達到了目的地。

〈到達〉は「ある地点に行きつく・達する」の意。一方、〈達到〉は「事物がある程度に達する・及ぶ」の意に用いる。従って、〈達到〉の目的語には、〈達到目的＝目的に達する〉〈達到先進水平＝先進的水準に達する〉のように抽象的な単語しか用いられない。又、〈到達〉の目的語には、〈火車到達了北京＝汽車は北京に着いた〉などのように具体的な場所を表わす単語が用いられる。

○達到了目的。

○到達了目的地。



⑥「（ごみ箱の）ごみを捨てる。」

×扔垃圾。

〈扔〉は、固体状のもの・まとまったものそのものを捨てる場合に用いられ、容器の中味を捨てる場合は〈倒〉を用いる。従って、ごみそのものを捨てる場合のみ、〈扔垃圾〉と言う。

○倒垃圾。

⑦「私達のクラスでは、大半の人はまだ北京に行ったことがない。」

×我們班里、大半的人還没去過北京。

〈大半〉は、「大部分・大半・大方」の意であるが、〈大半是中国人＝ほとんど中国人である〉のように副詞的には用いられるが、〈大半〉十名詞のように形容詞的にはあまり用いられない。しかも、「人」を表わす名詞〈人〉〈学生〉〈郡衆〉などには修飾することはない。従って、上記の様な例では〈大部分〉を用いるのが良い。

○我們班里、大部分人還没去過北京。

⑧「不満を感じる。」

×感覚不満。

「不便を感じる。」

×感覚不方便。

〈感覚〉は、多く身体上の感覚〈〈熱＝あつい〉〈冷＝さむい〉〈餓＝お腹がすく〉〈舒服＝気持ちが良い〉など〉を言い、心理面で感じるという場合は〈感到〉を用いた方が良い。また、感覚面・心理面の両方にまたがって使える〈覚得〉を用いても良い。

○感到（または覚得）不満。

○感到（または覚得）不方便。

⑨「あの映画を見て、私はとても感激した。」

×看了那個電影、我很感激了。

〈感激〉は、相手の好意・援助に対して、感謝の気持ちを抱くことを表わす。例えば、〈非常感激你了＝本当にありがとうございました〉のように。従って、日本語の「感激する」を訳す場合は、〈感動〉や〈激動〉が適切である。

○看了那個電影、我很感動了。

⑩「あの話は、もう決まりましたか。」

×那個話、已経決定了嗎？

「事柄」や「事」の意で用いられる「～の話」を訳す場合は、〈～的事〉を用いる。

○那件事、已経決定了嗎？

⑪「私の言う事がわかりますか。」

×我説的事、你懂嗎？

例⑩で述べたように、〈事〉は「事柄」や「用件」のことを言う。本例のように、「意味」のことを言う場合は、〈意思〉を用いるのが良い。

○我説的意思、你懂嗎？

⑫「私は野球をした経験がある。」

×我有打棒球的経験。

〈有経験〉は中国語では、実践を通して知識・技術が身につくことを言う。従って、〈他是一個有経験的猎人＝彼は経験豊富な狩人です〉のように用いる。本例のように、「～した事がある」という意味には用いられない。ただし、〈有過……的経験〉と〈過〉を用いると「～した事がある」という意味になる。

○我有過打棒球的経験。

⑬「君はいつ来たのですか。」

×你甚麼時来了？

これは日本語の「た」にひきずられた例である。この場合、聞き手は相手が来たことはわかっている。だから、今さら、来たのか来ていないのかを問う必要がない。動作が行なわれたことがすでにわかっており、ただその動作が行なわれた方法・時間・場所を述べる場合は、〈是……的〉を用いる。

○你（是）甚麼時候来的？

⑭「一年のうち、時には何度か彼をみかけた。」

×一年里、有時候看了他幾次。

これも、⑬と同様に、日本語の「た」にひきずられた例である。よくあった事柄や動作を表わす場合は〈了〉は不要となる。従って「いつも行った」の場合も〈常常去了〉とはならずに、〈常常去〉となる。〈了〉をつけると動作が終わったことを強調する意となるなど、〈了〉には注意する点が多い。

○一年里、有時候看他幾次。

⑮「日本の子供達は中国に関心をもっている。」

×日本的孩子們対中国很有関心。

〈孩子們〉の〈們〉を取った方がより良い。というのは、ここでは「日本の子供」と総体的に言っており、具体的にある一部分の子供達のことを言っているのではないか

らである。従って、〈們〉がない方がより良い。

○日本的孩子対中国很有関心。

⑯「最近、中国語を習う人達が増えてきた。」

×最近、学中国話的人們多起来了。

「～の人達」と日本語では複数になっていても、中国語では〈們〉がつかない場合が多い。例えば、「貧しい人々」は〈貧窮的人〉、「周囲の人達」は〈周囲的人〉となる。

○最近、学中国話的人多起来了。

⑰「昨日、映画を見たが、そこにこんな情景があった。」

×昨天我看了個電影。那里有這様的場面。

〈那里〉は具体的な場所に対する代名詞に用いられるので、抽象的な場所を示す場合は不適当である。従って、〈那里面〉とする。

○昨天我看了個電影。那里面有這様的場面。

⑱「あの話は進むでしょう。」

×那件事会前進。

〈前進〉は、前或いは目標に向って進んで行く事を表わし、主に行動・生産・革命などに用いられる。物事が進行し、局面が展開する意には〈進展〉を用いる。

○那件事会有進展。

⑲「これは小学三年の国語の本です。」

×這是小学三年級語文的書。

この日本語文を「～の教科書です」にすると、日本人ならだれしも〈……的課本〉とするであろう。しかし、例題のように「～の本」とすると、ややもすれば〈……的書〉となりがちである。日本語より中国語の方が、〈書〉と〈課本〉の区別がよりはっきりしている。

○這是小学三年級語文課本。

⑳「私は何度聞いてもついにわからなかった。」

×我聴了好幾遍、終於没聴懂。

〈終於〉は多く布望が実現した場合に用いられ、否定にはあまり用いられない。例えば〈終於成功了＝ついに成功した〉や〈他終於来了＝彼はついに来た〉などのように。一方、〈始終〉は否定の場合に多く用いられる。

○我聴了好幾遍、始終没聴懂。

㉑「彼の帰国後、彼から聞いたのですが……」

×他回国後、従他聴説……。

日本語ではよく主語が省略される。中国語もよく主語が省略されるが、例文の場合は主語を明記しなければならない。また〈聴説〉は、〈聴〉と〈説〉の主語がそれぞれ異なっていることに注意が必要である。「人から聞く」は〈聴別人説〉となる。

○他回国後、我聴他説……。

㉒「彼は私が中国語を習っている先生です。」

×他是我学中文的老師。

これは日本語的発想による文である。つまり〈老師〉は〈教〉するものであるので、中国語としては、〈老師〉と〈学〉はうまく結びつかないからである。〈学生〉と〈学〉は結びつくので、「私に中国語を習っている学生」は〈学我中文的学生〉となる。従って、例文をより中国語的にするには以下のように〈教〉を用いた方がよい。

○他是教我中文的老師。

㉓「あなたの娘さんはもとから美しかった。」

×你女児原来很漂亮。

〈原来〉は「もともと～（であった）」という意であるが、言外に「今ではそうではない」という意味も含まれている。

○你女児従小很漂亮。

㉔「ある時、こんな事があった。」

×有時、有過這様的事。

〈有時〉は「時々」「～する時がある」という複数的な意味に用いられる。「ある時～した」の場合は〈有一次〉を用いる。

○有一次、有過這様的事。

㉕「彼は卒業してまもなく帰国した。」

×他畢業以後、一会児就回国了。

〈一会児〉は「しばらく・まもなく」という意味である

が、これは「ちょっとの間」「短時間のうちに」という意味に用いられる。従って、例文のような「比較的長い時間」を言う場合は不適当である。

○他畢業以後、不久就回国了。

(Ⅱ) 語法レベルに関するもの

㉖「彼は全く自分の考えを変えようとしない。」

×他完全不変自己的想法。

〈変〉は主に自動詞として用いられる。他動詞に用いられても、〈変A為B〉の形をとる場合が多い。

○他完全不改変自己的想法。

㉗「今までの写真は全部焼いてしまった。」

×従来的照片都焼掉了。

〈従来〉は副詞であるので、名詞を修飾することができない。

○従前（または過去）的照片都焼掉了。

㉘「我々は実験に成功した。」

×我們成功了試験了。

〈成功〉は〈很〉の修飾を受け〈很成功〉というように形容詞として用いるか、或いは自動詞としてしか用いられない。

○我們的試験成功了。

㉙「今から行っても授業に間にあわない。」

×現在去也来不及上課了。

〈来不及〉は限られた時間内に他の動作をする暇がないという場合に用いられる。例えば、〈快要一点了、我們得上課了。已経来不及吃飯了＝もうすぐ一時だ。授業が始まるので、もう食事は間にあわない。〉のように用いる。一方、〈赶不上〉は限られた時間に遅れる意となる。従って、〈食堂已経関門了。已経赶不上吃飯了＝食堂はもう閉まってしまった。もう食事には間にあわない。〉のように

用いる。

○現在去也赶不上上課了。

㉚「私は彼女と結婚する。」

×我結婚她。

〈結婚〉は自動詞としてのみ用いられ、目的語をとれないので、前置詞句にしなければならない。

○我跟她結婚。

㉛「昨日、海辺を散歩した。」

×昨天、我散歩海辺。

〈散歩〉も、前例同様、自動詞としてのみ用いられるので、前置詞句にしなければならない。

○昨天、我在海辺散歩。

㉜「そこには、何冊かの本が紹介されていた。」

×那里被介紹了幾本書。

日本語に「～されていた」とあるため、受け身の〈被〉を用いがちである。〈這本書是今年写的。〉も「この本は今年書かれたものだ。」と訳すように、日本語は受け身を用いるが、中国語では主語と述語との意味的な関係から、受け身とならない場合がある。

○那里介紹了幾本書。

㉝「七・八月はよく雨が降りますね。」

×七・八月常下雨。

「よく～するね」と口語調の場合は、〈常常〉を用いた方がよい。また〈常常〉を否定する場合は〈不常常〉とはならずに、〈不常〉となることにも注意が必要である。

○七・八月常常下雨。

㉞「香港にはいくつもの日本語学校がある。」

×香港有好幾個日語学校。

〈好幾〉は数の多い事を強調する場合に用いられるが、〈好幾個〉となると十以下の数に限られてしまう。例文のように数え切れない数の場合は〈不少〉〈好幾百〉、〈好幾千〉等を用いる。

○香港有不少日語学校。

三、むすび

以上『母国語の干渉』ということを中心に、中国語学習者が共通して犯す誤りについてみて来たわけであるが、これらを分類して大別すると次のようになる。

(1) 日中両国語の言語習慣のちがい。(⑫・⑮・⑯・㉒など)

(2) 単語の意味にズレがあるもの。(①・②・③・④・⑨……など)

(3) 文前後の要素の影響をうけるもの。(⑤・⑦・⑲・⑳など)

(4) 品詞のちがい。(㉖・㉗・㉘・㉚・㉛など)

これらの誤例は、かなり多くの日本人学習者がこれまでに犯してきた実例である。我々教授者は以上の事をふまえて、㋑単語の意味内容の理解をより高め、㋺両国語

共に漢字を使用しているので、安易に置き変えをせず、
㈥より語法に注意するよう、それぞれの場で学習者に注意を喚起することが、中国語教学上かなり有効な方法であると考える。

(註) D·A·Wilkins『Lingnistics in Language Teaching』(p190) Edward Arnold, London 1977

(にしかわ　かずお・本学非常勤講師)

——連　載——

聞き書き—部落に生きる人たち⑧

闘って勝利する喜びを

話し手　丸尾　良昭さん
1941(昭和16)年8月1日生

聞き手　田宮　　武

「違う」と言えば差別やと思った

——部落の出身やといつごろ初めて知ったんかというようなことから話してもらいましょうか。これまで聞いたところでは、割りとみんな(部落であることを)知ったのが遅いんやわ。

丸尾　わたしでも中学卒業するほん間際ですね。それまでは全く知らなかった。それだからと言って、親が特別に教えてくれたんでもなんでもない。中学三年の卒業式の間際になりましてね、だから二月ごろじゃなかったかと思うんですけど。その当時、伊藤さんという若い女の先生がいて、二十四歳ぐらいやったかな。国語の先生やけど、ことばの違いについて「(どこそこの)部落のことばは違う」ということを言われたんですな。これ今考えてみると、別段悪い意図で言われたんやないかも分からなかったけど、わたしらはそういうことに関心を持ち始めとりましたから、なんとなく違うということにね。「ことばが違うとはなんぞや」ということで、「差別した」と、その先生を追及した覚えがある。

ここの部落の同級生が十五、六人おるんです。今の朝(ち)来中学校の前身の中川中学校なんですけど、三年生の生徒が約百人おりました。で、わたしは普段あまり表面に

出ることがないんやけど、その時はなぜかリーダーでした。みんな言うことをよう聞いて、卒業式の予行演習なんかも半分ボイコットしました。その時に、非常に奇異に感じたことがありました。(先生との)やりとりは単純なもんでね、先生に「謝れ」と。その先生は謝らなかったんですわ。自分のしつけが正しかったという認識があったんでしょうな。こちらはなにも科学的根拠なしに、「(どこそこの)部落のことばが違うとはなんじゃッ。差別する気か。謝れ」。謝らへんわけですね。「ようし、そんなら卒業式の予行演習なんか行かへん」と、あれは理科室なんかに閉じこもってね。女の子はみんな行きました。男の子ばっかし十人ばかり理科室へ…。それでも、先生は誰一人注意しに来ん。誰も注意しに来ん。

——(朝来中学校の)太幸先生の話とも関係してくるな。

太幸先生は「やっぱり部落はこわいからと思っとって、部落の子どもをよう叱りきれんだという弱さを持っていた」と話してましたけど。

丸尾　わたしね、非常に奇異に感じましたわ。子どもですけど、考えることは今とたいして変わりませんからね、ただ知識が浅いだけで……。「これはおかしい」と思ったけど、先生は誰も来なかった。終わる十分ほど前になったら講堂へ行ったんですけどね。それでも先生は誰も注意しなかった。まあ、自信なさそうなね、横の人をキュッキュッと見るような感じの素振りだけでね。その時に、なんというのか、これはもうわれわれのことを真面目に考えてないという考えを持ちましたな。

——その女の先生は「(どこそこの)部落のことばが違う」と言った時に、なぜ違うのか、どうしたらよいのかといったことに触れないで、ただ「ことばが違う」とだけ言うたわけやな。

丸尾　それだけ言うた。国語の先生でしたから、「国語」的な意味で言ったんだと思うんです。それで、結局その先生は学校クビになった。一方でそんなことをするんですね、教委は。一方ではわれわれにたいして全く放置しておく。問題を起こしたからいうて、その先生は駄目だと、クビにしてしまう。そんなことがありました。わたしらは子どもだから、溜飲がさがった、スウッとしたですよ。しかし考えてみたら、これは学校の責任放棄で、全くけしからん話ですわ。

——「ことばが違う」と言われて、どんな風に受けとめたんやろうか。

丸尾　「言葉が違う」というから、違う人間として扱われたと感じたわけですね。自分らに部落民という認識はないんだけど……。自分は「部落民」ということばを知ら

なかったけど……。しかし違う立場に置かれとるいうことは分かっとる。嫁はんもらいに行ってもくれへんし、行き来もできへんし、わしらは違うんやということは感じとっとるわけですわ。「差別」ということばは、わしら分かっとった。

――部落の青年とかが部落外の他地区へ結婚して行っとるとか、この部落へ来とるということがないから、分かっとったんやろうか。

丸尾　そうそう。「違う」と言ったら、そらあ差別だと、わしら知っとった。小学生のころは、なんというてもみんな学校のなかで腕っぷしが強かったもん。

――それほど元気だったら、同級生からなんか差別されるようなことはなかったでしょう。

丸尾　全くありません。なかったけど、生活があまりにも違うから、わたしらはやっぱり異常な感じを持っとった。

――生活とは弁当の中味が違うとか……。

丸尾　そう。ぼくなんか弁当をあけたら、ポンとパンが出てくることがようあった。食パンだけね。

――この前、イモをよく食べていたとか話してましたな。

丸尾　弁当にイモを持っていったことはないけど。食事にイモを食べた。物心ついたころからですけど、ジャガイモの蒸したやつを塩つけ三つか四つ皿に置いてね。飯どきに楽しみがないのはつらいなあ。今の生活なんかもう極楽やね。貧しさによる差別というか……貧しいためにいろんなことがあったのは数知れずほど。

――それは食べ物以外でもそうでしたのか。

丸尾　たとえば、服なんかにボタンが付いてないのはしょっちゅう。上級生と喧嘩やるしね。それから、このあかぎれがね、手にすごかったですわ。風呂にあんまり入れへんから、家に風呂があらへんからね。そういうことで、割りとものごとがよく分かる方だったから、系統的な勉強は駄目だったけど、質問されるとパアッと答えよったんですが、手を挙げるのは嫌いやった。あかぎれいっぱいあるから……。そんな記憶がありますわ。あかぎれは冬だけじゃなしに、全身あちこちにできとった。

――丸尾さんは元気はつらつとしとったから別として、ここの部落のほかの子どもがいじめられたりとか、差別されたりすることはなかったですか。

丸尾　部落であるということでいじめられることは、私の記憶にありませんね。分からなかったんですね。その視点がなかったんだろうということですね。ただ、あんまり貧しいから、やっぱし侮られるということはあったですな。長欠児がおりましたしね。部落民だということで「おまえら、エッタ」とか「汚い」と言われることは

なかったですね。それだけ、ここの部落の糾弾闘争がよう利いとったんやろう。

――そういうことがあるかなあ。「よっぽど注意せえ」とか言われとったんやろうね。

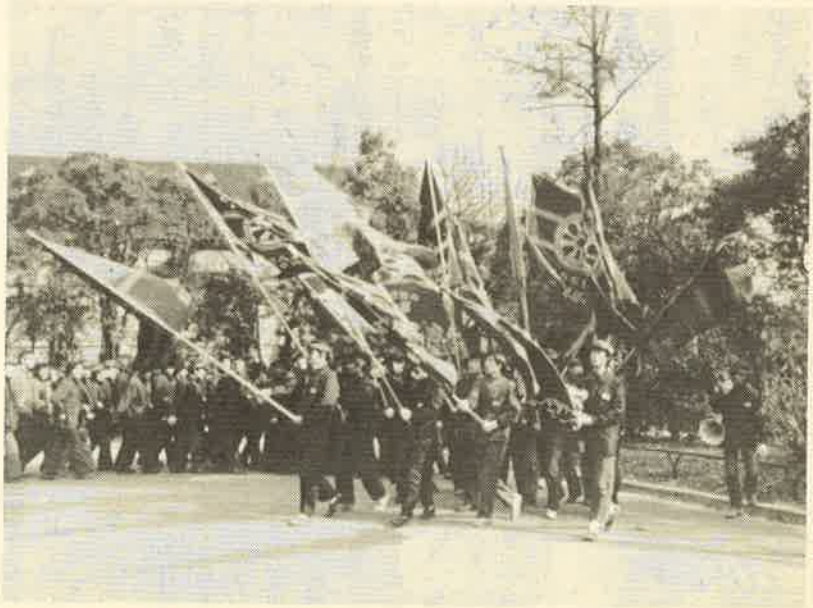
丸尾　それはそうだと思いますよ。わたしらでも「服破れとるのは、なんでや」と(服を)引っぱられたり、「ええのないんか」と言われたことあるけど、「汚い」とか「おまえら、違うからあっちへ行け」とか「これだ」とかそういうことは一切ない。

――服のボタンがとれていたりすると、あれこれと言われたことはありますか。

丸尾　そんなの、ここ破れていたら「おまえ、縫ってくれんのかいやあ」と言われたことがありますわ。そういう時は喧嘩せなんだことを覚えとりますわ。ドキッ、ズキッときてね。ほかのことなら、もう徹底的に喧嘩になりよったけど。そういう時はやっぱり「なさけないなあ」という感じがしよりましたな。

部落ボスがいた

丸尾　そういうことで、中学に入ってから、なかにはわたしらより差別について早うから知っとる子もありましたな。半年も一年も早くから「わしらこれだでえ」とこ



う(手ぶりを)しよるのがおりましたな。「なんだ？　それは」とわたしは言うとりました。わたしが知ったのは今言ったことばの問題の時で、それまでにもだいたいそういうことは聞いとりましたから、自分らは違うんだということは知っとりましたけどね。たとえば、「赤ちゃんはどうして生まれる」とか「恋愛はなんだかんだ」と、そのころの年頃ではよう話題になりますわな。それぐらいの程度の、まあ関心のあるテーマとして聞いとりました。だけど、一遍に自分たちの問題だなと思ったのは、中学の卒業間際ですよ。

――ここの部落の同級生はもちろん小学校から中学校へ行ったわけですわな。

丸尾　そうです。

――その中で長欠せざるをえないという中学生は別にいなかったですか。

丸尾　いや、長欠児がおりました。両親がいなくてね、おじさんのところにおったんだけど、おじさんの子どもは小さいし、子守りせんならんし……。第一、その当時は教科書も無料じゃないでしょう。それから、いろんな費用も全部負担せんならんでしょう。今と比べたら、長欠児童が出やすい状況でした。そのう、現金を(学校へ)持って行くというのが大変な苦痛でした。わたしの家でも、兄弟八人おるんですけど、まともに義務教育を終わったのは、わたしと妹だけです。あと全部は三分の一行っとるか半分行っとるか……。そうそう、わたしのすぐ上の二つ違いの姉と七つ違いの兄貴がおってね、この二人はまともに学校へ行ってない。それまでは割りと行っとる。この二人は戦争との関係だと思うんです。自分から言うのはなんですけど、この兄貴は非常に努力家でね。一日たりとも寝しなに鉛筆で字の練習をするのを止めたことがなかった。あれは感心ですね。だからほとんど学校へ行ってないけど、読み書きの不自由とかそんなことはない。

――学校の諸費の集金の時は？

丸尾　ええ、「忘れた」「忘れた」と、三、四回ぐらい言いましたな。五、六年ごろの印象が鮮明ですな。「忘れた」って、(金が)ないんですよ。前の教育長がわたしの五、六年の担任でね。非常にしっかりした人でね。この先生はえらかったですね。あのう、自分が貧しくて、弁当がないんですよ。当時の教師は貧しかった。で、どういったらいいのかな、中国の阿片戦争(一八四〇～二年)なんかの例を出してね、外国へ侵略したらいかん」とか、どんどん社会科のなかで教えてもろうた。ほんで、忘れもんした時でも、やっぱしわざわざ前へ呼んでね、「本当に

忘れたんか、どうやあ。つつみかくさんと、言うてみい」「いや、忘れました」と。子どもながらにも、本当のことは言えなんだ。それが、当時の教師としては最大のことでしょうなあ。

その当時の教師は教壇でやっぱり憲法九条の必要さを説いたしね。中学校に三浦という教師がおったけど、兄貴がフィリピンで戦死したんで、総選挙の前になるとね、「憲法を守るかいなかが、わしの兄貴がフィリピンで死んだことを再びくり返すかどうかの瀬戸際なんだ。今の憲法を守らないかん」と、社会科の授業のなかでとうとうとやった。その教師ね、今でも元気でおると思うけど。そのころの教師ははっきりしとりました。まだ戦争終わってから、十年も経ってないころですわな。わたしらはそういう教育を受けて大きくなった。うちの親父なんか、解放運動に関係なしにずっと社会党に投票しとった。社会党というのは好きやったね、子どもの時からね。まあ、中学生の時はそれくらいかな。

まあ、そんでも教師を一人辞めさせてしもうて、今思ったら、その先生に悪いことしたと思うとるんですわ。

――それは国語の授業に発言しはって、すぐに会いに行って追及したわけ？

丸尾　そうそう。職員室に行ってね。ぼくら十六人おるなかで、割りと女の子が少なくて四、五人だったんですけど、よう勉強できる男の子もおりました。ただ、そういう問題になると、不思議とわたしがやらされました。なんでかな。勉強なんか全くできない方でね。割り算、掛け算なんかできるようになったのは中学二年のとき。もう、ほんまによう卒業できたと思うわ。

――その先生にたいする追及は何時間か続いたんですか。

丸尾　いや、そんなに執拗にやってない。あれで十分か十五分かね。結局、職員室へ行ってね、「ことばが違うって、われ、なんだい」というようなもんでえ。で、「そういうことを言うとったら、差別やないか」と言うたことを覚えています。子どもですからね、こういう言い方なんです。

――ほかに何人かいっしょに行ったわけですな。

丸尾　ええ、三人ほど行きました。で、「謝れ」と言うと、その先生はたしか……よく覚えてないけど……「やっぱりことば違います」と言うたと思いますわ。それで、よけい腹が立ってしもうた。その先生は、二十三、四歳でしょう、だから割りとものごとを遠慮せずに見ていたと思うんです、その先生は。ただ、本質的に差別を撤廃せんならんというところまで考えていたら、それで良かったんだけど、その先生は現象だけ見とったと思うんですわ。

――なぜそうなるかが抜けていた？

丸尾　「だから、あんたら、がんばらないかんのや」というところまで行かんのやな。正直さがあるために、やっぱりその先生は詰め腹を切らされてしもうた。あと、ずるいやつは結局もう知らん顔ですわ。十年ほど前にその先生と出会ったんですよ。この物部というところで出会ったんです。わたしがその（中学生の）時のことを話したのを覚えてますわ。伊藤先生という先生でね。それで「伊藤先生、あのう覚えてますか。先生にひどいことしたと思うています」と言うたら、「そうですか」「先生の言うたことのなかで、大事なこともあったと思っています」「それは良かったですね」と、そらあ、冷たい言い方でした。その人にしてみたら、とてもじゃないけど。そう言ったですね。わたしは自分ながら立派なことをしたなあと思うとるんですわ。わたしは悪びれずにその先生にちゃんと話しましたよ。十年かもっと前かもしれませんね。

――十五歳ぐらいで、すでに先生を追及していたんやなあ。

丸尾　結局、「差別」と言うたんが大きかったんと違いますか。これには背景があるんです。ここ（町立福祉会館）から百メートルほど行ったところに、銅像があるの、ご存じかな。川井さんいう家のね。この人は兵庫県の町村会議長会の議長したりして、いわゆる地方における有力者ですわ。それから、兵庫県下の資産家のなかでも超A級でしょうね。この人が町議会の議長でもあったということで、「同和」ということばを一切使わせなかった。結局、持ってる力で「同和」ということばを封殺したんだと思うんですわ。だから、この部落は糾弾闘争を活発にやった村であると同時に、その後そういう有力者のおる村だった。町長なんか、川井さんのおる間はもうカイライみたいなもんだった。

わたしの知っとる限りで、聞いとる話もいれると、差別でクビになった教師は三人いるんですよ。一人はね、大正十一年か十二年の「トンビはトンビ、タカはタカ。生まれは変わらん」というのが一つでしょう。それからのち戦後になって、ちょっと記憶がアイマイだけど、多分昭和三十五、六年でしょう。統合中学校をつくるという時にね……中川地区には中川中学校があって、山口地区に山口中学があって統合して朝来中学校になる時にね。その朝来中学校ができる時に、その山口地区の大谷さんという女性の校長がね、「（どこそこの）部落の生徒をどうする」と問題提起したんですよ。それがさっきの話じゃないけど、差別があるもんだから、川井議長の逆鱗に触れたわけです。だから、川井議長は結局その校長の首をとばしてしもうた。「おい、気にくわんだら、ここ

の部落だけ中学校を建てたる」と言うてね。そして、相手の校長は謝ったり、言い直したりしたけど、(川井議長は)そのことばを絶対に後退させなかったね。そのことで、部落で一回総会が開かれたことがありますわ。

――校長さんの意図はどうやったのやろう。それは「どこそこの)部落のことばは違う」よりもすすんでいるようにも思うけどな。

丸尾　その校長の発言は良いようにばかり取れんのや。その人のご主人がいるんやけど……その人も校長でこれまたいっしょに失脚したんや。それほどきびしかったんやけど、そのご主人の方は今や日共の手先ですわ。まあ、その時の恨みを返しとるといえば単純な見方になるけど、ある意味では問題提起した時から悪かったとも考えられるね。本当に科学的に考えているなら、解放同盟の行き方も理解できたはずですけど。それから、伊藤先生と三人辞めとる。

この川井さんの存在というのは大きいね。このあいだ浅田林蔵さんが(聞きとりの中で)言ってたように、糾弾をやって、その後「これからは一人ひとりで解決しよう」と決めたということだったが、それからこの川井さんが登場してきたわけですね。だから、部落決議と川井さんの登場とは密接に関係しとるわけです。南但でも、ここの部落はもっと大きな役割を果たさんならんのやけど、いわば部落問題では鎖国政策をとったわけや。だから、南但民主化協議会(南民協)でも、ここの部落までよう来んかった。ここは主要なメンバーではないんですわ。

――川井さんの考え方というのはどうやったんやろうか。差別についての一定の考え方はあったんやろうかね。

丸尾　やっぱりはげしい怒りを持っとるわけです。しかし、科学的に武装してないから、持っとる力を振りまわすということをしたんですね。そして、振りまわすという力がよう効くから……。なにしろここの大集落を背景にしとるからね。それに才知のある人ですからね。だから差別にたいする怒りから出る要求はそんなに不純なもんでなかったと思います。しかし、自分の持っとる力で押えつけて行くというやり方でしたね。

空腹をかかえて自動車整備をおぼえた

――話を少し戻しますけど、中学校を卒業してからどうしましたか。

丸尾　尼崎に就職したんです。今からもう二十五、六年前のことですので、自動車はまだそれほど普及していなかったけど、わたしはそういう方面に関心があってね。それと、わたしは、なんか自分の置かれている立場に不

当なものを感じていて、夜間の高校に行きたかったんですわ。だけど、行かしてくれませんし、それで試験をたくさん受けてみたいと先生に言うたんです。そうしたら、整備士というのがあって、それは資格をとるのに試験をたくさん受けんならんからと、そんなことですわ。そんなら、整備士になろうと。就職の世話を先生にだいぶしてもらったわけです。ところが、昭和三十一年ごろといったら、不景気のどん底ですわ。就職するところがないんですよ。一ヵ月ほど待ちましたね。その先生が（就職口を）探してきてくれてね。尼崎のダイゲン自動車というところに入ったわけです。まあ、自動車のことを一生懸命習うということで行ったんですけど、困ったのは、生活の違いですね。まず、半年ぐらい事務所におってお茶くみ。

――整備士の仕事ではなくって？

丸尾　不満だったんですけど。だけど、お茶を入れるのに一番初めに大恥をかいた。ここらへんは茶がゆを炊くのに、「小茶（こちゃ）」いうて、白い布袋にお茶を入れて、初めからグタグタ炊くでしょう。「お茶を沸せ」と言われたら、それしか知りませんからな。一番初めに葉をこう入れて、炊いてしもうた。真っ黒になりますわ。そうしたら、怒られてね。社長がね、「そんなこと、知らんのかい」と、

ぼろくそに怒った。「知らんのかい」と言うたって、生活の違いですわ。知るも知らんもないわけや。それから、お茶のくみ方を教えてくれたことがありましたけど。だから、ことばなんかでも、たとえば「できもの」というのね、これは言ってもいいのかどうか、しょっちゅう考えましたな。もう、慎重に、自分の置かれている立場を現わさんようにね。ずいぶん慎重にやりました。そういう意味では、一つの学校に入っとるようなもんで、相手の心理状態を読むとか、いろんなことを工夫するとか、勉強してるようなもんですな。

部落ということがバレたのは写真でした。あのう、先輩でわたしをかわいがって親身に世話してくれた男がいるんですけど、わたしが盆に帰った時に、部落がなつかしいもんだから、山の上に上がってね。ここの写真を撮って、大きくして部屋の頭の上に置いといたんだわ。その人が来て、「なんだ。おまえ、部落かい」と、こうや。ぼくを部落だとは知らへんのや、しかし「この写真、なんや」と聞くもんだから、「これ、わしの村や」「部落かい」。すぐに言うたんじゃないですよ。「ふーん」と見といて、帰りしなに「部落かい」と言いましたね。なんで部落と言われたんか、分からんですよ。その写真を見たら、部落と分かるという知識を得るには、それからあとまだだいぶ経たんとあかなんだ。向こうは部落の中に寺があると知っとるわけや。こっちにはそんな知識はない。無防備や。そんなことで知られるわけもないと思うとるのに、知られてしもうた。

まあ、ひどい話ですね。その時は写真が原因だと分からなかった。それを知るのはずっとあとです。なぜバレたのか分からん。だから、尼崎の図書館にも通いましたよ。何回通っても、分からん。「部落ってなんだろう」と調べとうて、何回も行ったですよ。あの当時、わたしは三、四冊「部落」とか「村」という名前の本を買うとるんですよ。あのね、「断崖の村」とかね。ひょっとしたら、部落のことが書いてあるかも分からんと思ってね。結局、それは分からずじまいで、ずっとあとになって写真が原因だと分かったんですけどね。しかし、社長はわたしが部落であることを知っとったようです。学校の先生がわたしが部落だということを社長に言ってあったんでしょうね。

――先輩に部落だと分かって、それが会社の中で広まるということはなかったですか。

丸尾　それはなかったですな。というのは、整備工場の労働条件というと、無茶苦茶なんですよ。朝九時に始まるでしょう。晩の十一時まで仕事なんです。わたしね、

自分で言うのもおかしいけど、若手のホープだったですわ。一班は四人か五人で構成するんですけど、各班の班長さんがわたしを取り合いしましたよ。「おまえは愉快だし、おもしろいし、真面目だし、ようやるし」とね。ようかわいがってくれた。

しかし、さっき話した加納という先輩はその後陰険にやりましたな。喧嘩をしかけてきたりね。実際に、加納じゃない、加納の友達なんかと殴り合いをしたことがあって、柔道を知っとるのやからぶっつけられて、腎臓を悪くしたこともあるんですわ。考えてみたら、殴り合いの喧嘩はあれが最後ですな。何回もぶっつけられたが、最後には相手をノックアウトさせてしもうたけどな。今度はその親に呼びつけられてね。「うちの子をひどい目に合わせた」と。社長がわたしをかわいがってくれたので、社長に相談してね。社長はね「おまえ一人で行ってこい。どうにもあかんだら、わしが行ってやるから」と。それで、わたし行きました。その先方もあんまりええ生活してなかったと思うんだけど、旭ガラスという大きな企業がありますわ……その近所のスクラップ置場のね、えらいところに住んでました。そこへずうっと訪ねて行ったらね、向こうの親父が拍子抜けしてね。喧嘩相手はもう柔道やっとる大きな男なんですわ。わたしは小さい、年下ですしね。「おまえか、うちの子をひどう殴ったのは」「そうや」「そうか。おまえ、こんなんにやられたんならしゃあないがあね」と言うてね。その人は無事に帰してくれました。社長はわたしに「おまえ、えらいやっちゃなあ。なかなか謝りに行くもんがおらんぞ。おまえ、ええところがあるなあ」と言うてくれたことがあるんですけど、子どもながらにホッとしましたわ。喧嘩はしとうてしたんやないからね。あれが原因でね、腎臓を悪くして、一年ほど入院していたんですよ。

――それは何が原因だったんやろうか。友達から聞いて部落だと知っていたんやろうか。

丸尾　知っていたんでしょうね。だから、いびったんじゃないですか。そういう態度でしたわ。言うたのは、「色の黒い、但馬の山猿か」「ガラが悪い」「物を知らん」とか正面きって言うてました。わたしも「なんじゃいな、尼崎のドブネズミ、こらあ」「なにッ」と、それで殴り合いになりましたわ。

そうですね、ただ労働条件が目茶苦茶ね。休日いうたら月に二日でしょう。もらう給料が月に千五百円ですね。住み込みでね。だけど、それで仕事を覚えさせてもらってね。アパートは四畳半の部屋を会社が借りてくれましたからね。十五、六人の町工場ですから、食堂がなくて、

飯は普通の飯屋で食べるんですよ。飯食べさせてもらって、アパートに住ませてもらって、千五百円くれたら、当時の自動車の業界としてはええ方でしてね。仕事を覚えられたんですからね。だけど、今から考えたらつらい生活でしたね。とにかく空腹なんですよね。その当時、上下つづいた作業服が三百円、映画が安いところで五十円でした。下駄が一足百円でした。日曜日に映画を見てね、作業服を一着買ってね。下駄がまあ二月に三足要った。それを買ってね。まあなんかすると、そんなにおやつ買って食べられなかったですわ。家から仕送りしてくれなんだしね。昼は三十円。当時大きなパンが十円でしたな。うどんが十五円でしたわ。牛乳が十円か十二、三円かでした。だからパンを二つ食べて、うどん一杯食べると(三十円では)足らんぐらいでした。社長の娘さんがいたんですけど、その人も今から考えてみると、意地の悪い人やったなあ。一月分まとめてくれたらいいでしょう、それが昼間になると三十円もらいに行かんならん。それが嫌でね。

——昼になると、昼飯代の三十円を事務所かなんかにもらいにいかんならん?

丸尾　ええ、そのつどもらいにいかんならん。娘さんってやさしいもんなのにね。なんであの人に思いやりがないんだろうと今になっても思うんですけど。とにかく三十円。ひどい生活ですよ。ぼくら、自動車(整備)の技術をそないして覚えたんです。

——さっき夜十一時まで仕事をやったとか言ってたけど、そんなに遅くまでやっていたんですか。

丸尾　なにも仕事が終わるから仕舞うんじゃないんです。この時間に銭湯が終わるからね。油で真っ黒になる。わたしがやっとるのは六トンとか八トンとかのディーゼル自動車の仕事でしょう。大工業地帯の真中にあったので、帝国酸素とかなんとかいうフランス系の会社の仕事とか、尼崎市営バスや伊丹市営バスのエンジンのオーバーホールやら、ディーゼルばっかりやっていた。大変忙しかった。

そして、まあ五年おったんです。そのうち、一年間は病気で倒れとった。病気したりしたんですけど、二年ほどすると、但馬から人が採用されだした。最初、和田山(町)から一人、それから四年目に二人、五年目に二人と採用された。まあ、結局、わたしは但馬からきた後輩ですし……町工場ですから人間の移り変わりがはげしいんで、四年もおればもう古参級ですから、そらあ、わたしなりにかわいがりました。「かわいがった」と言うとことばが悪いけど、大事にしたということかな。わたしは五年になって、家庭の事情で但馬に帰りました。その後、

新日本運輸に就職しました。その時も、新日本運輸と全但バスのどっちに入りますかということだったんだけど。

――新日本運輸というと……。

丸尾　豊岡に本社があって、全国ネットの会社ですからね。新日本運輸というのは貨物の輸送をやっとる会社だけど、わたしは尼崎におる時から知っとるんです。その後、新日本運輸で十二年おって、そのうち組合活動を十年やっとった。それから、自分の会社を作って独立するんですけど、そのころから(解放)運動にかかわるんですね。また、あとで詳しく話しますけど。

部落の青年と付き合うのが嫌だった

丸尾　それで、自分が運動にかかわって、腹も立ち、驚きもしたことは、和田山町から来ていたのも、八鹿町から来ていたのも、養父町から来ていた(尼崎の自動車会社の)後輩はみんな部落の子だと分かったことです。北但から来ていた二人は確認していませんけど、まず(部落出身は)間違いないだろうと思います。そらあ、そらあ、年も違うて、町も違うて採用されとるんですよ。はっきりしとることは、部落の子を採用してくれる事業所について、教師の間で情報交換があるということですわ。そうとしか考えられんでしょう。わたしはそこに怒りを持っとるんですわ。教師がいかに卑劣なことをやっとるかと言うと、(わたしが)部落だということ言うてあるんですわ。なんぼその当時でも、そんな労働条件の悪いところはなかったんと違うか。毎日朝九時から晩の十一時までですよ。今の若い子だったらほんまに卒倒しますよ。

――労働条件が悪いことを先生が知っとりながら、部落の子だからといって送り込んだんやろうか。

丸尾　それでも、わたしにとっては採ってくれるだけで喜んだ。両親にしたら、ありがたがりよったですね、仕事を覚えられるとね。部落はそれほど劣悪な状態におかれていたということ。そういうこともありました。だけど、三年目に採用されたもん、四年目に採用されたもんと年度が違い、町も違うのに、みんな部落の人間だったということは、もう強烈なことですよ。自分が差別されたということでは、二十歳までで、それが一番きついことですね。あと、指さしてどうこう言われたことは……「汚れとる」「破れとる」「粗末だ」「行儀が悪い」と言われたことはあってもね。部落民だということで、指さされたことはないですからね。だけど、自分たちの置かれてる立場が違うということは、よう分かっとりましたよ。だから、今の子どもらも分かっとると思うわ。

――先生らは意図的に部落の出身者を紹介する形にしとったんやろうか。

丸尾　だから、部落の子を採る事業所ということで、情報網があったんでしょう。そらあ、あの労働の量はね……新日本運輸に入ったら、仕事が三分の一だと思いました。それほど、苛酷な労働です。

――但馬の方へ帰って来てからはどうでしたか。

丸尾　わたしが部落の青年とかかわるのは、新日本運輸に就職してからです。自宅から(豊岡市まで)通勤でしたから……。青年団に入れてもらうのに酒一本持って行きました。

――新日本運輸に勤めだしたのは、何歳ぐらいの時でした？

丸尾　二十一だったと思います。酒一升持って行って青年団に入れてもろうたけど、ところがもうビックリしました。わたしら、職業的には苛酷だったし、扱われるのは粗末に扱われたけど、いわゆる反社会的な行為をせずに大きくなった。だけど、もうここの青年というたら花札いらってね、バクチ。それから、酒はあるだけ飲んで、ゴロ寝。ちょっと家に余裕のあるのは単車買うて、女の子乗せて、山の中へ連れて行って、どうこう……そればっかりですな。もう、驚き入りました、ハァーと思ってね。

――やっぱり青年は仕事もやっていたんやろうか。仕事自体もなかったんやろうか。

丸尾　みなですか。仕事はみな土方に行ったりいろいろと……。仕事がなくて遊んどったというのはそうなかった。だけど、それが結局差別の結果なんだけど、展望がないですから。目標という展望がなくって、目的意識を持ってないから、当然の帰結ですわな。しかし、欲望はあるんだし。そらあ、単車でも買うてもらったら、女の子を乗っけて、こりゃあ幸いと山の中へ連れて行く。そんなに難しいことじゃないと思うんですわ、今から考えるとですよ。だけど、わたしはもう部落の人間は嫌いでしたな。わたし自身が嫌いやった。だから、職場に訪ねてこられても嫌いやったし、(国鉄の)汽車の中で出会っても嫌いやったし、嫌いでしたな。そこらへんの気持ちというのは、わたしが運動をやるうえで絶対に何回も反芻してこんならん問題やと思うんですよ。そういうことがあってね。

ところが、村の中では、わたしが行くといっつも青年と喧嘩でした。「堅いことを言う」と。そらあ、会議でも「チャンとテーブル出してしよう」とか言うしね。花札しとったら、文句言うたりしますわ。そういうことで、いっつも喧嘩しとりました。当時は、村の中では異端児でしたな。完全な異端児でした。全く一年間かかって、ボートというかプロペラ船造ったりしてね。そんなことに情熱を傾けましたな。

組合活動の経験がのちに役立った

丸尾　わたしが入社したのは、一月でした。一月、二月、三月と過ぎて、四月になったら、当時まだ集団就職のあった時で、三十七、八年のことで、九州から中卒の集団就職者が会社にズラッと採用されました。ちょうど景気が上向いてきだした頃でしょう。それで、妙なことが起きましてね。当時わたしが所属しとったのは本社の修理工場なんですけど、上田さんいう部長がおりまして、この人は能力主義の考え方を持っとったみたいです。新日本運輸というのは、戦前からあった会社やし、古参もおるし、入社したての者は入れば風呂焚きから始めたんです。しかし、入って一ヵ月もすると、ポンとそうした仕事をはずしてくれてね、一つの班をわたしに任せてくれた。かなり周囲から反発もあったんですけど、部下を三人か付けてくれた。当時、部品名でいうと、ブレーキに真空を利用しとるハイドロマスターとあエアを利用しとるエアーマスターとか、そういうものは新日本運輸では外注に出しとった。ところが、ぼくは尼崎で全部オーバ

ーホールやってましたから、入社してからすぐに外注しないで自分で全部やるわけですね。その方が大分経費が安くなるんですわ。「自分ところでやれるか」ちゅうわけですよ。交換部品だけですと、十分の一もかかりませんわ。人件費は同じですからね。そういうことがあって大事にしてくれたんだと思うんですけどね。

先ほど申し上げたように集団就職の子が三十人ほど九州からドッと入ってきたわけです。全部ではなかったけど、その子たちの教育をわたしが任された。わたしは基礎的な学問はないんですね。なんであんなことを部長がしたんかと思うんだけど、三十人ほど「教育せえ」と任されたんですわ。

――それは自動車整備の技術教育についてですか、それとも……。

丸尾　いやいや、一般教育を含めてのこと。「とにかく八時間中引き連れて、やれ」と。一週間ほどでしたかな。そらあ、大変なことでね。相手にどない言うて教えたらよいか、わたしにはとにかく基礎的な学問がないでしょう。それでも、一番いいと思って……一番自分がやってきたことを考えて、下積みのことをさせないかんと思って、工場の中の汚いところの掃除をみなさせた。片付いてないところをほとんどして、工場といっても広いですからね。あとは道具の持ち方とか教えましたけど。そんなことを主にさせた。そんなことを見てくれていたんではないかと思うんです、部長にはね。それで、その分だけ人間関係が密接になって、大変なことが起きたというのは、その後かれらが組合資格を持ってね……当時三ヵ月経つと持てたんかなあ、その秋かあくる年の分会の選挙があってね。だいたい一年ぐらい本社で教育してから全国の各支社に送り出すんですけど、その間に組合の選挙があったもんだから、その子らの票が全部ぼくに入った。もともと分会員は四十人ほどおって、古参が多いんですわ。その人らは一定の実績において票を取ったわけですけど、やっぱり二十五も三十票もぼくが取ると当選してしまいますよ。あとは(票が)割れていきますからね。それで、たしか二十一歳だったと思うんですけど、わたしが新日本運輸の本社工場の分会長になってしまった。わたしは部落民だとは誰も知ってないですよ。わたしは当時山本という姓でしたけどね、一般的な名前だしね。

わたしは泣かんばかりに「分会長をこらえてくれ」と頼んだけど、そうなったらみんな意地が悪いですわ。「選挙で決まったもんや、やってもらおう」ちゅうようなもんや。本当に、わたし会社を辞めることも考えましてな。口実に「給与が安いもんだから……」と(病気で寝てる)

母親に、「もうわしは辞めようか思うんやあ。給与が安いし……」と。うちの母親が「給与が安いから辞めるんでは、いつまで経っても辞めていかんならん。どこへ行ったって、満足な給与はあらへん。それはそれに合わせて生活していかんならん。どうしても(会社が)嫌なんだら辞めろ。給与が安いからと辞めると、一生のかぎりどっこにも居着くとこがあらへん。それどっちだ」と聞かれた。こっちも燃えるもんがあったし、「嫌や」とは言わなかった。それから組合のことも言わなかった。「やってみよう」とか「やれる」いう自信は全くないんですけど、初めて組織にかかわったんですからね。だけど、やらなしょうないし……。ほんで、そうですな、初めは考えましたな。

――それはやっぱり重荷に感じたんやろうか。

丸尾　そらあ、重荷ですわ。入ってまだ一年ぐらいやし、しかも組合のことが分からんでしょう。前の会社に組合があるわけないし。読み書きが不自由なことも自分には分かっとるし……。そらあ、大変なこと。分会の仕事というのも、割りと多いですしね。司会もせんならんでしょう、いろんなこともやらんならんし。まあ、二十一ぐらいで二十年近い伝統を持っとる職場の組合の責任者させられるとは……。生え抜きならまたいいですけどね。それから十年間、辞めるまでやから十一年になるのかな、組合の役員をずっとしました。その上田さんいう部長は、今から思うと、育てるいう気持ちがあったんでしょうなあ。だから、組合のことを時間中に言ったら、人の前で恥かかされた。「礼儀も知らんやっちゃ。組合の仕事を時間中にさらすとは何事や」と。そらあ、もう腹が立ってね。あれやられると、やっぱり人間は燃えますな。あれをやさしく言われとったら、「なにくそッ」という気持ちも起こらへんけど、コテンピシャンにやられるいうことはええことですな。今度一年経ったら、集団就職の子が十人ほどしか残らへんかったけど、また選ばれましたわ。その時はほかの人も入れてくれたんでしょうな。好むところではなかったけど、選ばれた以上はやるつもりでおりましたからね。それで、まあ、いろいろ勉強させてもらいました。もし、あの時組織というものを知らなかったら、解放運動の中でもどうなったことかなと思いますね。

――組合活動というのはいろんな形でのちに役立っているんやろうなあ。

丸尾　そらあ、もう。わたしは但馬の支部長もやりましたからね。但馬はだいたい五百人からの組合員がおりますからね。浜坂から、香住、豊岡、八鹿、和田山と、ずっと各分会を一人でオルグに回りましたからね、それは

ずっと後になりますけど。そういうことがありました。

会社では、上田さんいう部長は自分が一応工業界では名の知れた人間でしたから、単なる修理工という扱いをしなかったのは、立派だと思います。だから、五分間スピーチというのをね、みんなにやらせましたわ。毎日、朝礼の時に、順番でね。「会社の批判のことでもよろしい。組合のことでもよろしい。なんでも好きなことを言え」と。みんな好きなことを言わされた。その発言がない時は、誰かの研修のテープを聞いてね。だから、一般の修理工場と違って、教育をきちんとさせる職場でしたな。ラジオ体操でも一人ずつ前へ出て、号令かけてね。リーダーシップを取っていくことを教育する人間でしたな。えらい人だと思います。

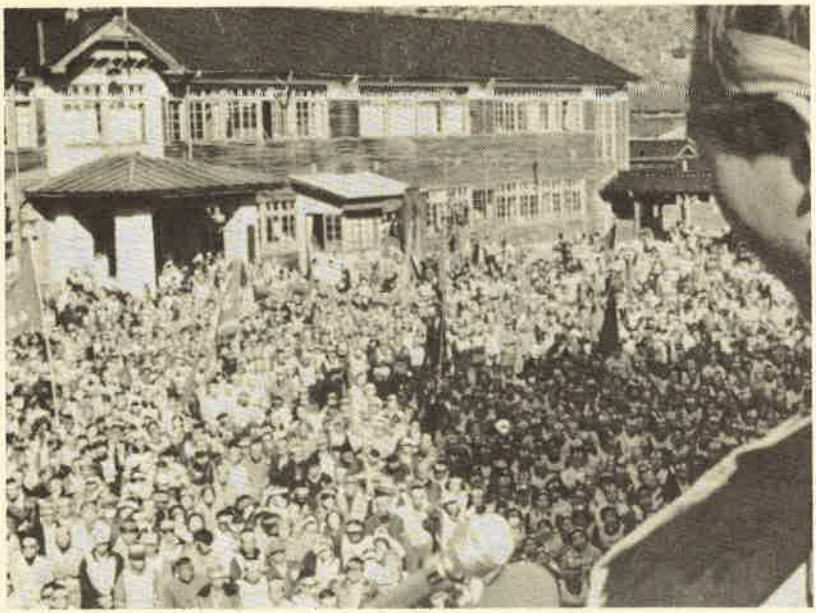
組合も三年、四年と出ると、全国の青年部長も二期やりました。一番最初にやらされたのは議長でしたわ。活発に意見を言いよりましたからね。わたしらの分会というのは修理専門でしょう。特に本社工場の置かれてる立場は、どちらかというと、ものを頼まれる立場でしょう。人間関係の中で運転手は頼みに来るわけです。同じ会社でありながら、賃金も運転手より低いわけです。運転手なんかは歩合制で入りますけど、本社工場はそれが全くありませんし、固定給で……。だから、話を聞いてくれるから、言うと。まだ二十三、四歳で若いですしね。それで議長をずっとやりました。まあ、緊張したり、勉強させてもらいましたな。一度賃金を倍増させたことがありました。一万五千円を三万円ぐらいにしたことがあるんです。その時は団体交渉権、罷業権などの三権を集約しました。投票をやって、スト権を確立して、九二%ぐらいの賛成でした。その時もわたしは工場の分会長で、若かったけど。なにしろ、集団就職で来て残った十人ぐらいの子が本当の手足みたいになって、よく動きましたからね。十七、八歳の元気な時ですからね。同僚は私が説得したりして……。

それから、あと組合の中で思い出すことは、部落問題ぬきですけど、わたしにとっては部落問題なんですよ。わたし自身の闘いですからね。あのう、但馬で対立候補が出まして……。わたしの分会からはわたしに「出え」ということで、結局引き受けて、決戦投票までやりました。あの時勝ってね、それで但馬支部長になりました。

部落と分かって差別を受けた

――丸尾さんは自分の自動車整備工場を今やっとるけど、あれを作ったのはどういういきさつがあったんですか。

丸尾　結局、会社を辞める原因になったのも、実はそれ



なりに組合を離れんような状態になってましたし。委員長は将来わたしに期待すると言うとりましたわ。そういうことで、東京の分室に「組合の専従として行かんか」というような話が内々にありましてね。これを断るということになると、組合の中でひとつの限界を示したことになるし……。商売始めようと思って整備工場を造った。

――その整備工場を造ったのはいつごろ？

丸尾　四十六年の暮れごろから造りはじめて、二年かかって、妻とわたしで造ったんです。専門家が入ったのは電気屋と事務所の屋根ふきとだけですわ。あとは全部もう……。

――あれッ、手づくりの工場ですんか。

丸尾　手づくりだったんです。鉄板はるのも全部。今日あんな工場あらへんわ、あんなボロ。だから運動できるんですよ。

――土地は自分のもん？

丸尾　土地は買いました。あれ、安かったんですよ。ある人が鉄工所を造ると言うてね、あれはみんな鉄工所の材料なんですよ。あそこに鉄工所造るっていって、材料持って行って、倒産したんです。だから、草の中に柱の鉄骨なんか散乱して、さびてボロボロになっていた。それをスクラップで買いまして、ペンキ塗りましてな、そ

れを建てた。屋根を屋根屋さんにふいてもらったあとは（自分らでやりました）。だから二年かかりました。事務所もなにも自分で設計してね、柱を一本建てたら、次の日曜日にもう一本と。次の日曜にまた一本というようにしてね。

――その間、新日本運輸に行っていたんですか。

丸尾　行きながらですわ。あの工場をやる時分に、要するに「同和」問題がずうっと取沙汰されて来たんです。だから、あれが逆でもう一年早く解放運動が起こっていたら、この工場をやっていないと思うんです。

ただ新日本運輸におった時分に、わたしは部落民であることを片時も忘れたわけではないけど、今でも反省せんならんことは、まず部落が嫌いだったということね。たとえば、（どこそこの）部落ね、あそこらあたり街道筋ですから、しょっちゅう通るわけです。そうすると、先輩とか後輩とか乗せていたら、「おい、ここちょっとふん囲気違うけど、なんでやろ」と問うてみるわけです。そしたら、大概（話に）のってきますからね。「ここ、違うんがなあ」と言うて。

――それは丸尾さんの方から問うた？

丸尾　そうです。

――ふーう。

丸尾　私が部落だと知ってないもん。だから同僚でも「おい、山本、きれいな女には気をつけよ」「なんでや」「違うのがおるがあ」と、豊岡のこういうことばだわ。「違うのおるって、どういうことだい」「いや、普段はええけど、ひとつ間違うたらうるせえから。きれいな女には近づくなよや。おまえはいつもキョロキョロしとるさかいに」と言うてね。まあ、冗談がわりにそういうことを言われたりね。そやけど、やっぱし、これはぼくだけじゃなしに、すべての部落出身の人にあることだけど、みんな苦慮しとりますやろうな、そういうことばを投げかけられる時には。そんなん、しょっちゅうでした。

――安井吉成さんが京都に勤めていた時に、車で京都の部落のそばを通ったら、そういうことを言われてね。いたたまれんような気持ちになったと（聞きとりで）言うとりました。

丸尾　そうですか。ただ会社を辞めた時に、もうひとつ……それは辞める原因ではないが、ひとつの時期だなと思ったのは、あのう、和田山の人にね……わたし和田山では一応管理職でしたんや。十二年おって、五年は本社工場におって、二十五、六歳ぐらいの時に、朝礼のスピーチのおりに、「わたしはもう国会議員にでも立候補できる」と言うたことがあるんです。「ほんで、本社工場

にいると、居心地がええし、みんな仲良くしてくれるし、うれしいけど、通勤の範囲からは離れられんけど、困難な職場があったらそこへ回ってもええ」と言うたことがあるんです。部長がそういう部長ですから、直に転勤に出してくれた。というのは、部長の腹心の資材課長が和田山の支店長に転勤したんです。その時に「君もいっしょに行ったってくれ」ということで、車輌管理の管理者だということで派遣されました。和田山になると、もう部落だということは隠しようがなかったですわ。わたしのことを知っとる人間がおりましたからね。だから、本社工場では知られないけど、和田山(支社)の人間はわたしを知っとるわけですわ。で、隠しようもなかったし、隠すこともなかったし……。七年おりましてね、その間にまた(組合の)支部長したりしました。執行委員もしたり、組合活動は変わらずしましたけど。

ただ、大衆の前で、組合員の前で面罵されることがありましてね。「こらあッ」と言うて、手を振り上げられてね。殴り合いはさっき言うた尼崎以来してませんからね、わたしは(手を)振り上げなかった。あの時に、わたしは部落問題を感じましたな。

――それは和田山へ来て、丸尾さんが部落の人やとみんな知ってるような時点でですか。

丸尾　うん。

――なにがきっかけで……、仕事のこととか……。

丸尾　仕事の面で(意見が)くい違ったんですわ。それにたいする反発もあったと思うんです。

――その人は丸尾さんの上司に当たる人なんですか。

丸尾　いえ、運転手です。もう五十いくつかの……。それが部落問題そのものであったかどうか知りませんけど、手を振り上げられたのだけには往生しましたな。あのう、心理的な問題として、差別を受けとる以上は、それを自覚しとる以上は、負けては通れんですわ。気分的にむずかしい問題でね。

――向こうはどんなことを言ったんですか。

丸尾　「いや、腹立ったからや」と。そのきっかけがよう覚えんのやけど、他人のことを話しとる間に、そういうことになった。向こうは向こうで、うっ積したもんがあって、やったんでしょうけど、ぼくは部落問題ととらえました。なんでいうと、客観的に喧嘩できる状態でないもんね。ぼくが尼崎で喧嘩したように相手をやっつけるわけにはいかんのやから。(そうすると)必ず向こうは部落問題としてとらえてきますからね。それで、組合でもだいぶ問題になりました。組合は「あの時わたしが殴らなかったけど、暴力事件を起こしそうになった」と問題

出してね。当時、書記次長しとった安岡という男が和田山の方へ調査に来てね、自発的に……。「これは差別がからんどる問題だ」ということで、だいぶ慌てとりました。委員長も手を引いて、それ以上問題は大きくならんだ。うまいこと解決できた問題じゃなくて、結局相手を謝らせただけの問題だったんですけど、家にまで謝らせにこさせたことがあるんです。

――相手はどんな発言をしたんやろう。

丸尾　いや、その時は差別のことは言わなんだけど、「われみたいなもん、なに怖いんやッ」という言い方だった。わたしはそれを問題にしたと思うんです。

――「われみたいな……」ということは、ここの部落の出身やと……。

丸尾　わたしにしたら、それしか取りようがないもん。ほかの解釈のしようがないし……。だから、そのことは非常に傷ついたことです。そのことを、わたしの妻の姉の婿が共産党の党員なんですけど、それに一度話したことがあるんですわ。そしたら、八鹿差別事件のあと、「丸尾良昭とはこういう男だ」と『赤旗』一面に記事が出たんですけど。「これまでもたびたび暴力事件を起こした」と。ワァハッハ、ハアー。わたしは共産党やからまともに考えていると思って、「面罵されて、腹立って、しょうがないんだ。どうしたもんだ?」と言うたことがあるんです。

――その相談を八鹿高校差別事件以降、一連の差別キャンペーンの中でそういう形に変わって出てきた?

丸尾　わたしが真しに相談しとっても、向こうの取り方が全然違うたということですわ。

被差別者の立場に立つか、部落を売るか

――丸尾さんが運動を始めたころは、この南但馬の部落の動きはどんなんだったんやろうね、昭和四十六、七年ごろですわ。

丸尾　うん、四十七年ですわ。わたしね、南但民主化協議会の総会に出たことがあるんです。部落の同対（同和対策）委員をやっとりましたから。その時に、山本佐造さんがものすごい流暢な演説をやっとりました。「しかしです。この問題の……」という形でね、ことばのはっきりした言い方でね。ところが、林田（幸之助）さんが弁当を配ってくれてね、あれは三百人もおりましたでしょうか。行政関係者もたくさんおるし……。その時、林田さんがぼくらの顔を見てね、若い子が二人ほど行っとったんですけど、「ご苦労さん」と言うてくれた。その時の温かさをわたしはよう忘れませんな。林田さんが見たら、部落の若いもんとすぐ分かったんでしょうな。まあ、服装なんかで分かったでしょうし……。心から「ご苦労さん」と言うてくれて、本当に温かい感じがしましたな。当時、林田さんは南但民主化協議会の書記次長でした。

――どこでやりましたの？

丸尾　和田山の団体事務所の講堂です。ひょっとすると、それは四十六年かも分かりませんな。四十六年ですね。四十七年は八鹿であったわ。それから、わたしは関宮（町）の林田さんところへ三日に一回ぐらい行きました。というのは、新日本運輸におるでしょう。わたしは整備関係の管理職ですから、あまりいいことではないけど、時間をとろうと思えば毎日でもとれる。それで、林田さんの近くにグンゼの下請け工場があって、わたしところの営業所の車が毎日のように往来しとった。それに便乗して行って、林田さんとこで一時間ほど話していると、ちょうど荷物降した時間になると。話が終わると、工場まで行ってまた車に乗せてもらって帰ると。そうですね、一年ぐらい通いました。七、八十回行っとるかもしれませんね。（部落問題を）知りたかったからね。

――ここの部落の同対委員……区長の下につくような委員を何年ごろからやっていたんですか。

丸尾　四十六年だと思いますわ、同対法が四十四年からですので。芦屋市あたりから県教委へ教育要求が出てきたのがそのころからだったと思います。そういうことで、県教育委員会が同和教育副読本の『信愛』とか『なかよし』とか作った。朝来町も同和教育を進めなならんような状態になってきたんですな、県教委の指導でね。そのおりに、「ヘタしたらあかん」と、部落に相談に来た。昭和四十五年だったかな。今日、（八月）十六日でしょう。夏休みですけど、新井の祭りで、盆踊りの太鼓の音がポンポン聞こえとった。だから十年ほど前の今日ですね。校長室で、太幸（史朗）先生も教頭でおったし、村から六人で行った。その中にわたしも入っとった。そこで「『信

愛』を使ってもよいか、同和ということばを使ってもよいか」という相談が初めてあった。学校の方から地区へ話があったんです。

――その時に、太幸先生の話だと、部落のみんなは「取り上げてもらっては困る」というような感じの話だったとか……。

丸尾　いや、そうでもないですよ。ただ「あんまり過激は困るし、一般地区の人にもっと勉強させてくれ」という話は出ました。

――その後、運動のすすみ具合はどうなっていきましたか。

丸尾　わたしが南但民主化協議会の青年部の副部長をしました、四十七年でしたかな。南民協の場合、各部門の部長は全部一般の人でした。副部長に部落の人がなる方針なんですよね。だから、山本佐造さんにしても副会長か書記長かでね。その南但民主化協議会の集まりに初めて同じ新日本運輸にいた安井義隆くんを引っぱって行ったのが、ちょうどあの赤軍派が浅間山荘事件（一九七二年二月）を起こして、最後の攻防戦をやっとる時で、冬でした。その中で、福祉事務所の所長かなんかが「あんたら、一遍部落の青年を集めないやあ」と言うことで、ボーリング大会を初めてやった。それが南但青年部にずうっとつながっていくわけです。そういう経過がありました。

わたしも組合活動やってなかったら、その後部落解放運動をやっていくなかで、だいぶテンポが遅うなったのと違いますかね。だけど、問題が起きても、各分会にオルグに行って、二十五、六歳でしたが、批判されたり恥かかされたりして、そんなんやっとりましたから、それが役に立ちましたけど。

それと、やっぱし今でも思うのは、所詮部落民と生まれた以上は、被差別の立場に立つか、仲間を売るか、どっちかしかありまへんでえ。部落の側に立ちきって闘うか、それとも売るか。中間はないと思いますわ。

自転車屋店主と警官を糾弾した

――そのころのことで、ほかに記憶に残っているようなことがないですか。

丸尾　昭和四十年ごろやったかな。まだ（豊岡の）本社工場におる時に、新井（朝来町）の自転車屋と口論したことがありました。あれも差別やったな。わたしが整備関係の班長で、若い子が三人ほどついて、その担当区域がね、竹野、香住、浜坂、八鹿、和田山などでした。一ヵ月に一回、ジープに道具と整備員を積んで点検に行きますね。そういうことで、新井で車が故障したら、わたしが行っ

とったわけですわ。その時にたまたま一人で新日本のサービスカーに乗って、ずうっと来たんですわ。そうしたら、部品が足らんようになって……小さな、こんなボールベアリングの玉なんです。わたしはほかのことで、新井の自転車屋に出入りしとりましたから、そこへ部品をもらいに行きましたんや。金持っとれへんしね。それで、こんな玉一つですから……わたしらなんかでもネジの一本ぐらいはそんな作業服着とる人にはやるんですわ。「これ、どないやろう、もらってもええやろうか。今大きいもん(金)しかないでえ」とこない言うたんですわ。そしたら「大きいもんでもええでえ」と言われた。それで、わしはカアッときた。わたしはおんなじ町の人間やという意識がありましたから……。そんなもん、ほんまにそこいらに放してあるようなもんやからね。

それで、業がわいたけど、「そんなら取ってきますわ」と営業所へ行って、そこの清水所長に「清水さん、ちょっと金おくれや」と言うたら、「なにするんや」「こういうことで」「そんなら持って行っておくれ」と。そして、また自転車屋へ行ってね。「おい、今大きいもんでもええでえと言ったのはだれや」「いや、冗談やがあ」「冗談ですむか。ひとが急用で来とるのに。取れッ」と言うたんや。そしたら、みんなジロッとしとった、ぼくが怒っとるもんやから。「なんぼや、金(額)言わんかい」「いや、もうそんなもん、ええがなあ」とほかのもんが言うから、「ええと言うが、取っとれ」と言うて、投げたんや。あれ、十何円かな。その時に、今町会議員に出とる上田稔というのが奥から出てきて、「そのがき、どこのやっちゃ」と。ぼくが「(どこそこの)もんや。それがどないしたあ」と言うたら、「(どこそこの)もんか、何が怖いんじゃあ。こらッ、そいつ逃がすな」と、こない(言うて)きた。一時間ほどそこで喧嘩した。そうしたら、戸を締めてしまうしね。一瞬「こりゃあやられるなあ」と思いましたわ。殴られはせなんだけど。

その時に直に小一時間ほどしたら、ポリ(警官)が来ましたわ。そして、ポリが言うのには、なんにも取り調べもせずに「おまえ、暴力を振るうたな。逮捕する」と、こうなんですわ。それで、わたしピンときてね。まず職場(の首)が危ないと思ったですわ。「こりゃあ、えらいこっちゃ」と思って、「なんでわしがおまえに逮捕されなら ん」と聞くと、「おまえは暴力を振るうた。他所の家に因縁をつけた」と、こう言うた。わたしはそれが一定の説得力があると思ったので、「どないしたらこらえてくれるんか」「謝れ。そしたらこらえたる」とポリが言うた。そしたら、上田というのがどない言うたかと言うと、「初め

からそない言うとったら、こっちも大きなことにせんでもよかったんや」と、こうや。「こらえてくれるんか」「こらえたる」。向こうに従業員が五、六人もおりましたよ。それで、わしが「すんませんでした」と謝った。「こらえたる。そない言うとったらええんじゃ。ホホホォ」と笑ってね。ポリが「それだったらこらえたる」と。その時には新井の(営業所の)所長も来とりましたな。「こんなことは知らなんだ。えらい迷惑かけました。今度よう言うて聞かせます」と、一般地区の人間やから一方的にそういうことを言いましたね。

それからあと工場までどないして帰ったか、記憶がありませんな。(自宅に)帰ったら、うちの母親が「青い顔しとる」と心配しよりました。その当時、もうわたしは青年を集める力を持っとりましたので……みんなよう集まってくれたわ。二台ほどの車で(自転車屋へ)乗りつけました。そして糾弾しました。それからポリも糾弾しました。その時に、一回だけここに部落解放同盟がオルグに入っとりました。わたしは解放同盟はなんか知らんかったけど、「解放同盟」の名前を出しましたわ。どういう形で出したかというと、ポリのところへ行ったんです。「こらあ、早う逮捕せえ」と行きましたんや。「おまえ、謝ったからこらえたる」「なにぬかし(言う)とるんや。あれはな、その場の便宜や。早う逮捕せえ」こっちは人間もようけ行っとるし、ポリがびびってしもうて、奥さんがお茶出したりなんかしよりましたわ。その時に「わしらはな、訴え出るところがあるんや」と言うたんです。向こうは解放同盟のことを知っとったんと違いますか。ポリが「謝る」と。「謝るではすまん。わしら今から上田ところ(自転車屋)へ言うて行くんや。またおまえはそれを脅迫だと言うんか。はっきりせえ」「いや、向こうから脅迫されたと言わんかぎり、警察としては取り上げん」「間違いないな」「間違いありまへん。」あれね、その晩はポリとところへだけ行ったんですわ。ほんで四時間ほどおって、その明くる日も行って、ほんまにポリを糾弾しました。あれはもう糾弾ですわ。

――明くる日にもまた行ったんですか。

丸尾　また行ってね。「きのうも言うたように、向こうが警察を呼ばんかぎり、おまえ関係ないんやな」「ないかぎり、うちは関係ありまへんね」「ようし」と上田はんところへ乗りこんでね。「こらあ、これからポリに連絡するなよ」「絶対に言いません」と言わしておいて、あれ、自己批判書を取ったね。

――上田さんいう人が自転車屋の店主なんですか。

丸尾　そうです。その人が自転車屋兼運送屋をやっとっ

たんです。だから、向こうにはライバル意識があったんやろうね、今から考えると……。こっちゃはそんなことに頓着ないわけや。

――だから出入りしてる自転車屋と思うて、小さな部品ひとつもらいに行ったと……。

丸尾　結局、ライバル意識があるところへ、まあ、(自転車屋の)店頭の方でもめだした。ボンボンようものを言う。「それ、どこのもんや」「(どこそこの)もんや」。持っとる意識で「なに、怖いんや」ということですわ。それぐらいだったら、喧嘩ですんどるんやけど、結局ポリを呼んどるからね。あれ、自己批判書にね(自転車屋の)親父の実印を押さしてね。自己批判書を取りました。そして「一切の脅迫を受けておりません」というやつもね。それからもう一回ポリのところへ行った。「おまえしたこと、こない書いとるぞ」と。ポリはあの時ほんまにオロオロしてね。あれは二十三歳の時やったかな。

――その発端は、こんな小さな玉で、「こまかいお金を持ってないんやけど」と頼んだことからなんですね。

最初にお金のことでやりとりした店員は、丸尾さんが(どこそこの)部落の人間だと知っていたんやろうか。

丸尾　知らなんだやないですか。わたしが部落の人間だとほとんどの人は知らなかった。八鹿闘争を闘っとる時でも、わたしが(どこそこの)部落の人間だと、あんまり知らなんだ。だから、差別キャンペーンはある意味ではよう入った(効果があった)んと違いますか。なにしろ、五年ぐらい地元にまるでおりませんし、こっちへ帰っても、豊岡(の本社工場)におる時は、こっち六時半の汽車に乗りよりましたからな。そして戻るのが七時でしょう。青年会活動はようやっとりましたけど、あまり交友関係もないしね。あまりみんな知らなかったんやないですか。先生も差別の事象をようけ聞いとると、少々の差別のことやったら、「アーア」という感じになりますやろう。

――あまりたくさん聞いとるとね、(そういう感じになってしまう)。

丸尾　そうなると思いますわ。だけど、これひとつでも

大変なことなんですよね、本当のとこ。しかし、あまり累々と(差別事件が)あると、もう「ハハァーン」という感じで……。

――でも、いろんな差別事件には共通点があることが分かってきたけど。

丸尾　わたしは自分の心理で困ったことがあると思うのは、共産党による組織的な、露骨な差別を経験してしまったんで、通常そこらにある差別事件は差別と敏感に反応しなくなってしもうた。

――それは、しかし困ったことやな。

丸尾　いや、ほんとに困ったことや。良くない。しかしね、ことばの言いそこないぐらいのことは全く「ハア」とも思わんようになってしまったね。

――そりゃあ、大量の露骨な差別キャンペーンと比べてみたらね。

丸尾　共産党による差別が厳然として存在しているなかで、個人の言いそこないぐらい責めてなにになるんやという気持ちやね。それはすでに解放同盟の活動家としてはいかんことです。共産党のやっとることは、あんまり露骨ですからな。まあ、小さな差別事件を見逃すようではいかん。だけど、共産党のような悪いのを見てしまうとね。

小さな差別事象を取りあげて青年を組織した

――昭和四十八年でしたか、部落解放同盟の支部が各部落で結成されたあと、どんな具合に運動をすすめていったんやろうか。

丸尾　まあ、南但の解放運動というのは、自分らで言うのはおかしいけど、ひとつの理想を実現したというように思うとります。ところが、青年の諸君らともたまに話すんですけど、それは偶然にしたんではなくて、ずうっと南但青年部の諸君が山田久(差別文書事件)闘争を起こして闘っていく過程のなかで、基本的な動作はきちっとやっとるんですね。そらあ、それを抜きにして南但の闘いを絶対に語ってはいかんほど、基本的な動作をやってきたと。

――「基本的な動作」って、どんなこと?

丸尾　たとえばね、部落大衆にたいする徹底したオルグですね。これをやっぱし部落の区長なんか少々顔をしかめてもええ、大衆に訴えかけていった。それから、山田闘争の初期の段階では、壁新聞をこしらえて、それを部落内に張っていって、部落大衆の目に直接つくようにした。それから、小さな差別事象でももらさず取り上げていってね、きちっとやっていく。それを妥協せずにやっ

ていく。なんぼ困難があっても、旗をまかずにトコトン押していく。そのなかで味方をつかみ出していくと。だから南但青年部なんかでも、一番初めに朝来町で小さな確認会をやって、その時はたかだか五人か六人。

――その朝来町の確認会って、どんなことでやりましたのか。

丸尾　あのう、社会教育主事がね、わたしにあることで「いやしくも、なになに」と言うたんです。わたしがね、「ほかのところではいいけれど、われわれに〝いやしくも〟というようなことばは使うな。それはなんの意味だあ。おまえにそれを言うてることが差別だと分からしたる」と引っぱってきて、それをやるのに青年ら……(安井)義隆君らをおいて、その場でやったことがあるんです。その時は義隆君なんかよく分からなかったと思うけど。その表現とか発想のなかに、われわれが差別を感じてしまうということ。

――「いやしくも」というのは、丸尾さんが何かを言った時に出てきたんかしら。

丸尾　そうそう。もうちょっと詳しく言うとね、あの当時教育委員会のなかになんとか教育事業というものの書記局みたいのをわたしがしとってね。その予算がなんぼかな、今から思うたら年間で四万円ほどあったんでしょうね。あと五千円とか六千円の予算が余ってね、「どうしようか」という相談だったと思うんです。わたしが公正なこと以外は嫌いだから、もっとまともなことを言うたんだけど、向こうとしてはまあ「ごまかしてくれ」という風に取ったんですな。それで「いやしくもこの金をそんなことに使えるか」と言うんでね。「いやしくも」という表現もさることながら、結局悪どりしてるわけですわ。それが結局差別なんだでえということを青年の前で分からせとる。

そういう時には六、七人だった青年が、今度和田山町でやると、次に十人に増えとる。和田山町の青年を糾合するわけですな。それ、今度養父町でやると、また増える。やっぱり基本的なもんをきちっとやってると思うんですわ。それから、総括をしょっちゅうやりよりましたしね。終わったあと、今日言えなんだ人、それから言えた人、それから向こうの問題点と……。それ一つひとつ取ってみても、基本をきちっとやっとったわけですわ。本部を和田山にかまえておったんだけど、飲んだり、食ったりせなんだしね。若い子って、立ちあがると、一向にこたえへんのですな。本当にものすごいエネルギーを出してね。だから、青年自身に自分たちが絶対に正しいことをやっとるいう確信がありましたからね。だから強

かった。それから、部落大衆と接する時でも、部落大衆にものすごく親切丁寧に。いわゆるボスとか権力者のようなものについては、ある程度手厳しくやると、よく使い分けてね。底辺から勝ちとっていきましたね。

それから、やっぱしわれわれは糾弾闘争のなかで、多くの仲間を勝ちとったね。共産党の(差別)キャンペーンいうのは全く逆に書いてあるんだけど、糾弾闘争ではわれわれは糾弾する相手を大事にしましたわ。決して殴ったりはしなんだでね。だから、糾弾闘争に参加したものはみんな確信を持ったわ。

――それはいままでいろんな人に聞いても言ってることだわね。解放運動に参加して、ずうっと子どものころから「部落が悪いから差別されるんや」と思ってたことが、「差別するやつが悪いんや」というように考え方が変わったと言うてる人がありました。それまで卑屈だったのが自信を持って「やらなきゃならん」というようになった、そういう教育の役割みたいなもんがあった。みんな確認会、糾弾会に参加して、「やらないかん」と思うようになったと……。

丸尾　だから、基本をきちっとやったこと。いうまでもなく暴力を振るうとか相手の人権を侵すとかなかったこと。とにかくみんな立派だったのは、煙草を吸う者が一

人もいなかったからね、糾弾会の場で。南但では煙草を吸わん。それほど緊張してやっとった。それから、子どもの発言を尊重したしね。小学生であろうと、中学生であろうと、高校生であろうと、それを「子どもだから止めい」と言った者は一人もいなかった。立派だったですよ。だから、南但の解放運動がなぜあそこまで盛り上がったのか、理由は簡単で、トコトン真面目であり、それから愛情に満ちあふれておって、基本をきちっとわきまえておったということ。そらあ、差別者、差別をしてしまった人たちにたいするわれわれの配慮ということでは、自信がありますよ。だから、太幸さん(朝来中学校教頭)でも、珍坂さん(八鹿高校校長)でも、結局、われわれの残してきた足跡にたいして評価してくれていると思うんですよ。だから、共産党は差別キャンペーンではわれわれに勝つことはできなかった。

(青年部は)みんな若かった。みんな二十歳(はたち)、高校生。十七、十八、十九、二十。(安井)義隆君で、当時二十五歳ぐらいでしょう。やっぱし世の中を変えるには、それぐらいの年齢のもんが動かな、ほんまのことあきまへんなあ。わたしは当時もう三十一、二でしょう。三十一、二なら、むしろ年とっとるぐらいです。

――糾弾闘争のやり方というか、確認会、糾弾会の持ち方については、どういうところから勉強してきたんやろうか。

丸尾　糾弾闘争にたいする考え方ですけど、わたしは糾弾闘争を南但でやるまで、どこでも見たことがないんです。

――南但の部落では、西宮の差別行政糾弾闘争に参加したことで、初めて解放運動にふれたと言っていた人もいましたが、丸尾さんの場合は?

丸尾　わたしは西宮(差別行政闘争)に行きましたけど、別に感銘を受けたことはなかったですな。ただ、当時の書記長の山口さんが、機動隊がバァッと乱入してきた時に、上で冷静に演説しとったのだけは立派やなあと思った。

わたしは「'73部落解放運動」の本を持ってましたからね。糾弾会についていろいろ書いてましたから、それを読んでいた。あれはどこを糾弾する時かいな、さっき言った朝来町の教育主事を糾弾せんならん時だと思うんですけど。工場の若い子とキャンプに行っとって、みな泳ぎに行くし、わたしテントの中で糾弾の仕方を、どないしてどうしようなあと読んどりました。手づくりのつもりですけど。机を隔ててやるというのは、「大地の夜明け」という映画を見たら、そういう形でやっとりました。それに、(労働)組合の団体交渉の時もそうですしね。そういうことで、そういう具合にしました。あとはできる

だけ若い諸君に闘うことの喜びを知ってもらうこと。自分の組合活動の経験からいうと、若い諸君は成功すれば大変なエネルギーを出す。がんばって不成功に終わった場合、また挫折感が大きいということを肌で知ってましたから、とにかく部落の青年に理屈は必要ないと、理屈から入った場合駄目だと確信持ってましたしね。だから一番気にしているところで闘い、勝利できたら、おそらくどの子も結集するだろうと思ってましたので、そういう視点から糾弾闘争を闘いましたね。だから通常みんながよう分からんなあということでも、わたし自身が差別であるという確信を持っていたら、確認会を組織しましたけど。たいがいそういう形でやりました。

――「一番気にしていたところで……」というのは、具体的にいうと、どういうこと？

丸尾　結局、自分が被差別の立場にあるということでしょう。その被差別の立場にあるという自覚がないんですよ、割りとね。ただ、なにしてもあかんだとか、相手になってもらえるんではないしと感じとる。それから、貧しさとか職場がないとかいうことにたいするギリギリのものは持っとるけど、自分が被差別の立場にあるから、このように努力せんならんという科学的なものはなにも整理されていないわけです。もっとも気にしているのはそこで、貧しさも職場がないということも、展望が持てないということも、結局、差別なんだということを、若い諸君にどういうように教えるかということ。それを机の上で学ばせるということは好まないから、自分たちに喜びが出てくるような場面で、なおかつそれを体得できるようにする。自分たちはなにを次にやったらよいかということも、なるべく分かりやすく説明すると。わたしとしてはそういうことを考えて、そんな方向でずうっと取り組んだつもりなんです。

だから、糾弾なんかでも、二割ぐらいは相手をたたいても、あと八割ぐらいは青年たちに聞かせるというか、部落大衆に聞かせるというか……。なぜ自分たちはここにおるのか、なぜかれらをこのように追及するのか、なぜわれわれはこのようにしんどいのかということをじっと教育していったつもりです。これは解放同盟の本来的ないき方なんです。それをずっとやってきた。それが効果があったので、だんだん自分たちで確認会を持てるようになってきましたわ。その場合でも、技術的に乗り切れないと見てましたから、たいがいわたしが乗り込むか、行けない場合は(安井)義隆君に行ってもらった。

糾弾闘争を生き生きと闘った

――やっぱり最初のころ糾弾会をずうっと組織していったのは、丸尾さんが中心になって、安井さんが協力して……。

丸尾　そうですね。

――差別事象の報告は各支部の青年部を通じて上がってきたんですか。

丸尾　山田久(差別文書事件)の方針のなかで、「各部落におけるいろんな差別事象というのは山田久との関連で発生している」と規定していましたから。それは大事なことだったのです。個々別々にやったら、失敗すると、わたしは考えてました。それはわたしが部落大衆と接して知ってますから、(当時の)部落大衆の発想の仕方、論理の展開、抗議の仕方では、行政なり差別者を打ち抜くことができないと思うてました。一旦組織したものが負けたら、もう闘えませんからね。それで直接わたしが行くか、(安井)義隆君が行くかしました。

――山田久差別文書事件の差別性というのは、どういう点でおさえていたんやろうね。ひとつは、山田久が行政の講演会に行って「人権を大切にせんといかん」というような建前と、息子にはいろんなことを言いたてて「部落の女性とは付き合うな」と差別をしていくという具合に、本音と建前が全然違うということがあると思うんですけど。

丸尾　結局ね、大ざっぱにいうと、部落大衆が目覚めておらないということ。同和行政の対策事業ひとつにしても、部落解放の方向というか部落民の自覚をふるい立たせる方向でやられていないということは、やっぱりこれは差別行政だからだと規定していましたからね。だから、部落大衆の現在の悲惨な意識、眠りこまされている状況というのは、すべて行政の施策の打ち方に問題がある、融和行政なんだからと規定していましたからね。それは山田の(差別)文書が発覚する前の、(昭和四十八年)の十月に南但青年部が結成されたおりに青年が五十人ほど参加したんだけど、われわれはもっと多くの、百人ぐらいの青年が参加すると思ったんですわ。五十人ほどしか参加しなかったということで、総括した時に「やはり融和行政の結果、部落の青年が眠りこまされているんだ」という結論になった。そこで各町の行政点検にはいった。和田山町もやり、養父町もやりしたんですわ。

――和田山町の青年の(青年部結成への)参加が一番少なかったと聞きましたね。

丸尾　うん。今言ったような規定が先にあって、山田久の差別文書というのはそれを裏付けるような形で出てき

たわけです。結局、行政的には社会教育を通じてでも、もちろん同和教育を通じてでもあるが、その視点が部落大衆が自覚的にものごとを発想し、意欲的に問題解決に当たるというようにはふり向けないで、恩恵的にやって惰民を作るという方向だけで打ち込まれているから、問題があるという規定の仕方をしたわけです。自分たちで確認、糾弾会をやりたいという支部もあったんですけど、例外は二、三あったかも分かりませんけど、百ほどやったうちのほとんどに(安井)義隆君と調整して行きました。特に行政なんか追及する場合、なかなかむつかしいですね。向こうも免疫性を持ってきてますからね。打ち破っていくことが大事なんですけど、打ち破るという発想をなかなか部落は持てないんですね。頼んでしまうんですね。頼んだら(行政は)なにもしてくれない。やっぱり行政にしても、議会にしても、学校の教師にしても、本当に部落問題を手がけさせようと思うんだったら、損得勘定で計算させるようにせんかったら駄目ですな。やる方が得か、やらん方が得かと。そういう発想というのが割りとないんですね。だから安易に頼んでしまう。頼んだら最後、もう力の限界を見せたようなもんで、ダメですな。

――ただ行政の損得勘定の仕方がね、「うるさいから」「面倒やから」ということで、「やっとったらええやないか」という発想はないやろうか。

丸尾　それはさせてませんけどね。われわれの場合はそういうことはないね。なんでいうたら、朝来町(全体)のメリット、デメリットの問題も、われわれは相当に深刻に行政に訴えましたからね。たとえば、学力の問題でも、ここの部落の生徒は、なかにはようできるのもあったけど、親の生活環境からいうて、学力の面では小学校でも中学校でも底辺を形成しとると。それは結局学校全体としても、朝来小学校でも中学校でもよくできる子も含めて可能性を低めているんじゃないか。全体のレベルが低いと、相対的によくできたということになるが、社会的な競争力の面でみたら、学校全体の低学力という形に反映されてくると。わたしの賃金闘争の発想もあるけど、やっぱり最底辺を上げることが全体のレベルを上げる一番の近道や。底辺を綿密に上げていきさえすれば、自然と学校全体のレベルが上がると。そうすると、部落の生徒の低学力の問題はやっぱしすぐに取り組まんといかん問題やないかと追及してきたんですよ。割りとよく教師に入りますよ。

部落問題を手がけさせるのは、部落問題の独自性を明らかにすることと、部落解放が社会全体を進歩させるという確信を相手にあたえて、そして協力をさせる、そう

いった論理で入っていくと大変効果が上がります。社会正義とか「差別したらあかんのや」とか分かりきったことを言うたかって、反動には勝てない。だから、行政より運動は論理的に数段上のものを持ってないと駄目ですよ。表現は適切でないかもしれんけど、行政を動かすだけの力がないとね。それ以外に行政にものを頼んだって、あきませんわ。「頼む」ということばを言うた時は、もう仕舞いですわ。

だから、糾弾闘争を闘っていく視点というのは、そこから全部やりました。みんな確信持ったし、生き生きとして闘ったわ。

聞き書きメモ

① 今回の聞きとり調査で報告した丸尾良昭さんは、兵庫県朝来(あさご)郡朝来町の被差別部落に生まれた。この部落は南但馬にある約二十の支部のなかでも最大の部落であり、戦前にあっても数多くの糾弾闘争を闘ってきたところである。丸尾さんもそういう伝統を受けついで、一九七三(昭和四十八)年に部落解放同盟の各支部が結成されるころから、戦後の南但民主化協議会の年輩の運動家と若い青年の橋渡し役をするとともに、多くの差

別糾弾闘争と行政闘争の中心的な指導者として働いた。現在、自分の生まれた部落の支部長であり、また八鹿高校差別教育糾弾闘争にたいする弾圧裁判の「被告」団団長として、八鹿公判闘争を闘いつづけている。

② この聞きとり調査は、一九八一年八月十六日の夜八時から二時間半にわたって、町立福祉会館で行なったものである。収録したテープの内容については、部分的にカットした個所も若干あるが、ほぼ全部の話をまとめることができたと思う。

③ 今回から数回にわたって、数人の青年からの聞きとりを報告しながら、八鹿高校にたいする差別教育糾弾闘争を含めて、差別からの解放をかかげて、どのように考え、行動し、闘ってきたのかを明らかにしていきたいと思う。

（たみや　たけし・社会学部教員）

—研究余滴　ヴェルレーヌ 1

ヴェルレーヌの位置

山村嘉己

1

秋の日の　ヴィオロンの　ため息の　ひたぶるに
身にしみて　うらがなし　……

といったむしろ上田敏の名訳で有名な「秋の歌」でも

巷に雨の降るごとく　我が心にも涙ふる
かくも心ににじみ入る　この悲しみは何ならん　……

と展開される雨のパリの情景でも、ヴェルレーヌの詩のいくつかはボードレールやランボーの詩のどれにもまして人々の間に愛誦されながら、不思議にも彼に対する評価はこれら二人に較べると意外に低い。それは恐らく彼の詩に思想性が乏しいという判断に基くものであろうが、一方では彼の人間性そのものに、つねに動揺してとどまることのない不安な弱さが潜んでいたことによるのかも知れない。といって、ボードレールもランボーも、どちらもその現実生活は破綻そのものであった。しかしこの二人には、一方は求心的、他方は遠心的なという違いはあっても、その現実生活を支える根本的な生活体系を破壊してやまない飽くなき拒否の姿勢があった。もう少し具体的に言えば彼等が生きている現実のブルジョワ

3歳のヴェルレーヌ

社会に対しても、またそれを思想的に支え続けてきた西欧近代思想、キリスト教的世界観に対しても、ボードレールはそれらを全的に背負い込んで苦悩し、ランボーは最初から、そのすべてをふり払い、無垢の自分を確認しようと苦闘した点は異っていながらも、ともにギリギリのところまで一身を賭けて闘い抜き、それを表現しつくそうとしている。従って彼等の詩にはそのまま人間の思想と生活とがその極限の姿で燦然と輝き出ているのである。ヴェルレーヌはボードレール的宿命観を誰よりも鋭く理解し、一方ではランボーの持つ無限の未来性を心から愛し、それに殉じながらも、その両極を完全に自分のものとすることはできなかった。たとえばランボーの天才に賭けるあまり、時にはホモ・セクシュアリティにまで埋没しながら、妻マチルドへの恋情をあくまでも断ち切れない優柔不断さ、悲鳴に似たカトリシスムへの祈りを捧げながら、遂にはアルコール中毒にまでいたる酒毒への沈湎、こういった現実の彼の姿はまさにそのまま、彼の作品、彼の作家的あり方の根底を写し出しているのである。その消極性、その思想性の不徹底さなどが、特に文学鑑賞にも思想性を尊重するわが国の読者からヴェルレーヌが高い評価を与えられなかった大きな原因といえるであろう。相反する特異な個性を持った二つの天才に挟まれて動揺する哀れな取巻きといった風情がヴェルレーヌの中にはいつも感じられていたといってもよい。

2

しかし、ヴェルレーヌの作品にもっと近く接近する時われわれはそこに多くの新しい面を発見する。たとえば敏の名訳ゆえにむしろ年配の隠遁者の嘆きぶしのように感じられた「秋の歌」が、実は二十歳にもならぬ年少詩人の、極めて意識的に構成された実存的観念の詩であること、即ち、三联とも死を根底に引すえた人間存在のあり方を歌ったものであることを知ることができるし、

また、「巷に雨の降るように」も、そのさりげない歌い口の中に実に精妙な韻律の計算があり、内部心理と外部情景の微妙な交錯によって典型的な象徴詩のあり方を示していることが理解されてくる。そういえば彼の処女詩集が『サチュルニアン詩集』と題されたことにも深い意味があるのであって、すでに出発のその時からあえて不幸な凶運を背負って生きる負の姿勢への決意を示すとともに、『悪の華』を「狂躁と憂鬱の、サチュルヌ的な」書と称していたボードレールの意図をそのまま引継ごうとする彼の企図を内密に包みこんでいたのである。事実、マルチノはその著『高踏派と象徴主義』の中で、このようなヴェルレーヌの姿を次のように措写している。

「この青年詩人は豪華で「大がかりな」ボードレール的テーマを、小さい、素朴な、繊細優美な、陰気くさいテーマに転換した。彼の「サチュヌル的」憂鬱はボードレールの憂鬱が持っているきつさを持たない。それはいわば軽度の神経過敏であり、そのおかげで彼は、日常茶飯の光景のなかに、匿されたたぐい稀な感覚を味わうことができたのである。」（木内孝訳一三四頁）

「女と牝猫」と題する次の短詩などはそのようなヴェルレーヌの特色をはっきり示している。

彼女は猫と遊んでいた、
白い手と白い服とが
夕闇のなかにからみ合うのは
目にするだけでもすばらしかった。

彼女は隠していたのだ――ひどい人！
黒糸で編んだ手袋の下に
人殺しの瑪瑙（めのう）の爪を
刺刀（かたな）のように鋭く光る

5歳のヴェルレーヌ

ヴェルレーヌの父と母

猫の方も甘えたふりで
鋭い爪は隠していたが
だけど　邪心をなくしてはいない！

かくて　寝間のなか　音高く
空気を振わせ笑いが響き
四つの燐光がかっときらめいていた。

いくつかのボードレールの「猫」と比較すれば、その軽妙なタッチはたしかに魅力的だ。しかし、この詩はあくまでもスケッチで存在感が乏しい。いずれ詳しく個々に当って確認するが、ヴェルレーヌの真骨頂はまさにこの繊細ともいうべき感覚の微妙なたゆたいの中にあったといえよう。それゆえに彼の詩にはまた微妙な音楽の韻律がよく感じ取れたのであった。

弱まった曙が
沈む陽の
憂鬱を
野いっぱいに流す。
その憂鬱が
優しい歌で

沈む陽に
われを忘れる
ぼくの心をゆする。
砂浜に沈み込む
夕陽さながら
ふしぎな夢が
朱色の亡霊となって
たえまなく現われ
砂浜に沈み込む
大きな夕陽さながら
たえまなく消えて行く

この詩などは「ユノーブ・アフェブリ・ヴェルス・パル・レシャン・ラ・メランコリ・デ・ソレーユ・クシャン……」とたとえ仮名表記で書いてもその音の美しさは伝えられそうに思われ、また、その音の流れと夕暮れの物憂い心の鼓動とがふしぎに響き合う気持にさせられてしまうような詩だといえよう。

3

この少しばかり憂鬱で、少しばかり神経過敏なミニ・ボードレール、ヴェルレーヌに、「地獄の夫」ランボーの出現は激しい衝撃を与えた。この少し前、女性に自信の

なかった彼にやさしい救いの手を伸べたマチルド・モーテとの出会いによって、ヴェルレーヌの詩境は幸福の波にひたる『快い歌』となろうとしていた。

厳しい試練のときは去ろうとしている
ぼくの心よ　未来に向って頬笑みかけよ
涙にむせぶほど哀しかった
あの不安の日々は　もうすでに去った

と告白し、

ゆけ　歌よ　一気に飛んで
あの人の前に行き　伝えてほしい
忠実なぼくの心に
一筋の明るい光が輝いて
不信も　疑惑も　恐怖も
あの愛の暗い不安をみんな
散らし去ったと　ああ聖なる光よ
そして　今や　日は高く昇ったと。

と歌い上げていたヴェルレーヌの前に《途方もない通行人》としてランボーが現われ、このささやかな幸福を木っ葉みじんに打砕いたのであった。ふたたびマルチノの言葉を借りれば、

「途方もない理想にまで彼を引き上げ、彼の想像力のなかに新しいヴィジョンの一世界をつくり出し、彼の知性と感性を高めて、もはや過去の生活にも同時代人たちの普通の関心事にも執着を持たぬ一個の超人に仕立てあげようとした」（前掲書一三六頁）

のである。事実、ランボーは真の《見者》として、前人未踏の詩的世界を確立していた。「酔いどれ船」などに見られる異様なヴィジョンはヴェルレーヌにとって息もつまるような衝撃であった。かくて《愚かな処女》となったヴェルレーヌはまさに全身全霊をあげてランボーの世界に没入した。時にマチルドへの未練が彼の心をよぎることもあったが、この時覚えたアルコールの魔力とともに、ランボーの影響力はその後数年、彼を離れることはなかった。もちろん、ヴェルレーヌにランボーの持つ異様なまでのイメージの鮮烈さはない。ランボーの自由詩の持つ炸裂してやまぬ奔放なリズムもない。その意味でランボーの詩はヴェルレーヌの詩とは全く異質のものだ。しかし、《詩人としてのあり方》に於てはランボーは

ヴェルレーヌを一新したと言ってよい。『言葉なき恋歌』は二人の苦い体験から生まれた詩集だが、彼特有の軽妙さは相変らず光っていても、そのイメージのなかにどこか乾いた悲哀の影が走っている。

逃走は　緑がかった　バラ色で
丘をこえ　斜面をすぎて
物みなをくもらせに来る
ランプの薄明に沈んでゆく
つつましやかな深淵の上に

梢の見えぬ小さな木々の黄金の葉は
静かに静かに　血の色をにじませ
名も知れぬかそけき鳥がさえずり出でる。

それほど多く哀しみを示さず
これら秋の装いは姿を消すのか
単調な秋風にゆすぶられて
ぼくの苦痛はただ夢を追う。

空想や感覚の陶酔への趣向はいよいよかき立てられ、その結果、現実の印象が、さまざまにデフォルメされて展開される。一方、ランボーの自由詩に触発された「詩法」への興味は、

何よりも　先ず　音楽を
そのために　さらに茫漠と
さらに空中に消える《奇数脚》を好め
のしかかり押え込む何物も持たぬ

さらにまた　何らかの誤解も持たぬ
言葉を選ぼうとしてはならない
「不確かさ」が「確かさ」とからみ合う

灰色の歌より大切なものは何もない。

で始まる有名な彼の詩学を作り上げたが、これはやがて当時の若手詩人たちの規範となり、いわゆる象徴派の《音楽性》を支える重要な指標となったのであった。ランボーの燃えつきるような文学界からの消滅によって、ヴェルレーヌはやがて自らの意志と関係なく詩壇の巨匠となる。三度、マルチノの言葉を借りれば、

「一八八五年頃、若者たちはヴェルレーヌを発見した。そして、彼の詩のためというよりは、彼の風変りな生き方のために、彼のシニックな態度や身なり構わぬ態度のために彼を愛した。彼らはそこに、当代の社会に対する一種の反抗意志を見出したのである。ヴェルレーヌという男は、高踏派詩人の典型たる純潔な「竪琴ひき」ではなく、あらゆる抗議と自由解放の象徴たる「純粋」詩人であった」（前掲書一四〇頁）

酒に耽溺し、売春婦を愛しながら、心の中には信仰と純真とをけっして失わぬ詩人と信じ、その頽廃の理由はあまりにも豊かな天性と、汚れない真心のゆえと考えた人々はあまりにも美しい背光をヴェルレーヌ像に与えていたのだ。

しかし、時を経てこの伝説のヴェールがいつかはぎとられた時、人々はボードレールとランボーというあまりにも偉大な個性に囲まれて色あせるこの詩人の実像に目ざめたのであった。所詮小さな衛星の一つに過ぎないと判断した人々の目は、類い稀れなヴェルレーヌの音楽性にも同じように冷ややかな一瞥しか与えなかった。しかし、ここでその彼の限界を認めながら、自らを囲続して燃える二つの太陽に、あれほどの接近を試みそれなりの誠実さを扱み取ろうとすることもけっして無意味な作業とは言えまい。私はしばらくこのまがまがしい土星びとに視線をとどめてみたいと思う。

（やまむら　よしみ・文学部仏文科教員）

—連　載—

日本中国 ことばの来往（ゆきき） その21

芝田　稔

車窓から見た東北の変貌

去る六月、私は本学派遣教授の一員として、姉妹校である沈陽の遼寧大学で過す機会を得た。六月といえば、大阪では梅雨の季節であるが、沈陽一帯では全ての草木が初夏の装いを整える頃合いであり、湿気のないすがすがしい日が多かった。

沈陽にはこれまでにも、公務で二度訪れているが、何れも二、三日程度の滞在であった。しかもその最初は厳冬の十二月下旬、二回目は七月中旬の真夏であった。今度は森羅万象が厳しく永い冬から開放されたばかりの、一番時候の良い時期で、しかも一ヵ月という期間は、私にとって手頃な外国生活の期間であった。

さて、ここでは五十年前の「東北地方＝トンベイ・テイファン、旧満州のこと」を想い出しながら、今日の風景から見た二、三の印象を紹介しておきたいと思う。

その一は、沈陽から大連へ行く鉄道沿線の風景から読み取った東北地方の変貌である。

沈陽駅を出ると列車は南下するのだが、六分後には渾（コン）河を渡る。この辺りから広大な平野が開け、十五分も過ぎると貨物駅の蘇家屯である。五十年前、撫順炭砿に勤めていた頃、連休ともなれば大連へ足を伸したものだ。

その往復とも、この駅で乗替えの時間待ちをしたものである。今はもう見覚もない。「高粱＝カオリヤン」や「玉米＝ユイミー、とうもろこし」の畑がプラットホームから目の届く限り波打っていたように思うのだが、今その風景は無い。なんと、水田に変っているではないか。

水田といえば、その頃撫順に住んでいた朝鮮族の農民が水稲栽培をしていたことがあるが、沈陽以南の広大な地域で、こんなにも大掛りな水田があるとは、私にとっては驚きの一つである。列車が遼陽、鞍山、海域を経て二時間後には大石橋で停車したが、この附近まで水田が続いている。川らしい川がないのに、灌漑をどうしているのか。聞けばほとんど地下水を利用しているとのこと。したがっておいしい米が産出される。その昔、東北地方の住民は高粱やとうもろこしを主食にしていたのであるが、今は「白米飯＝バイミーファン」が主食になりつつあるという。水稲の収量も一畝（日本の六アール）当り一千斤以上だというから、換算すると反当収量は七、八俵にもなる。沈陽以北については未知であるが、最近ハルビンへ行った商社マンによれば、松花江のほとりでも水稲栽培が行なわれているとのこと。だとすれば東北農業も大いに改革が行なわれていると見なければならないのである。

大石橋からさらに南へ、熊岳城、得利寺、瓦房店、三千里堡、金州へと、この間すべてリンゴの産地である。これは昔と変りない風景であった。

その二は、沈陽駅を出てから二十分。前述蘇家屯から五分ぐらい南下したところに「紅苕＝ホンリン」という新しい駅がある。貨物の集散駅らしく、引込線が多く貨車の列が続く。一九六六年にここで良質の炭田が発見され、已に採掘が始まっているという。また耳寄な話であるが、沈陽市街地域には優良な炭田が眠っていることも判明しており、東北の地下資源は無尽蔵の感がある。

これまでの数十年間、中国第一を誇ってきた撫順炭砿

撫順炭砿の露天掘坑

も、その出炭量において、大同炭砿に王座を譲ることになった。有名な撫順の露天掘は、あと三十年の寿命で、それ以上はコスト高になるため、斜坑か竪坑か何れかの方法で採炭するのだという。そうなると、曽て満鉄が経営していた撫順の新市街は消滅する羽目に立たされる。三年前に撫順を訪れて、露天掘の展望台に立った時、露天掘北縁中央にはまだ〝大山坑〟のヤグラが残っていた。もっとも、その東側に並んでいたはずの〝東郷坑〟の竪坑ヤグラが撤収されていたのには驚いたのであるが、今回はその〝大山坑〟も姿を消していた。見覚えのある建造物といえば発電所、オイルセール工場とセメント工場のみであった。

現在、山西省の大同炭砿が採炭の隆盛期に入っていると聞いたが、それを裏付けるかのように輸送道路が新しく敷設されている。それは北京北方「八達嶺」の長城を訪れた時に分ったのである。

長城の手前に「居庸関＝チューヨン・クワン」という有名な関所がある。観光客には長城しか頭にないので、最近ではバスもタクシーも、ここを素通りしてしまうことが多いらしい。先を行く車はみな素通りである。私は何回も来ているので、帰りにここに立寄るよう運転手に命じたところ、彼は急に車を止めた。去る五月から一方

通行になったというのである。

そういえば、長城の観光を終えて「明十三陵」へ行くのに、長城の北門をくぐり、一たん長城の外に出てから張家口――北京の公路に入り、やがてそれとも分れて東へ走る。この新しいアスファルト道路は、河北省東端の港町――秦皇島へ直結するそうだが、起点はもちろん大同である。これが鉄道輸送をカバーする〝送炭〟公路であり、大同から日本へ石炭を運ぶ一番の近道となる。

その二は、鉄道沿線に散在する農家の変貌である。都市近在の農家は、人民公社解体後の請負制度によって、力一杯働くようになり、加えて農産物の自由市場への対応に頭を使うようになった。農業も創意工夫をこらし、経済作物で勝負する農家が増えているようだ。何しろ「万元戸＝ワンユワンフー」という流行語が生れたほどだから、都市郊外の農民の〝ふところ具合〟は、推して知るべしである。その結果といえば短絡すぎるかも知れないが、沿線に散在する農家には、ほとんど各戸に「天綫＝ティェンシエン、テレビのアンテナ」が立っているのである。聞けば白黒テレビの段階であるが、農村の需要に供給が追いつかない状態だといわれている。

（しばた　みのる・文学部中国文学科教員）

お知らせ

投稿募集

最近読んだ本の書評・内容紹介・批判等の作業を通じて、自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表・論文・エッセイも結構です。

詳細については、生協本部3F「書評」編集委員会までお問い合わせ下さい。

投稿規定は以下の通りです

▼原稿は原則として縦書きで、一行二五字、二二行（五〇〇字）を一枚と計算します。ただし短評は、一行二〇字、二〇行（四〇〇字）を一枚と計算し、五枚以内にまとめて下さい。

▼枚数は自由（ただし編集上の都合で何回かに分けて掲載することもあります）。

▼締め切りは各月末日。

▼送り先　〒565　吹田市千里山東3－10－1
関西大学生活協同組合「書評」編集委員会
☎（06）388－1121（内線4821）
（06）387－9998（直通）

▼原稿には住所、氏名、学籍番号、電話番号を必ず記入して下さい。

▼原稿は返却しません。必要な場合はコピーをとっておいて下さい。

編集後記

書評七五号をおとどけします。

当初発行予定より非常に遅れたことをお詫びします。

今号から山村嘉己先生の連載「研究余滴」がボードレールからヴェルレーヌに変わりました。今後の活躍に御期待下さい。

さて皆さんも御存知かと思いますが、六月末に仏文科の小川雅也先生が逝去されました。故小川先生は、十七世紀のフランス古典劇の研究で多くの業績を残されており、また関大生協の活動に対しても深い御理解と支持を頂いておりました。現在書評編集委では、故小川先生の業績とお人柄をしのび、各学部の先生の御協力を得、追悼集を作製中です。

試験期間も終り、学生組合員の皆さんはそろそろ〝学園祭〟の準備に忙しい時期(?)にさしかかっているのでは……。〝模擬店祭〟と批判されながらも〝学園祭〟が開けるだけ恵まれた環境にあると言うべきなのでしょうか？

先日某誌の特集〝学生運動は再生するか！〟に目を通しながら、商業ベースではない新しい価値を創造する試みが学園祭から失なわれて久しい感をあらためていだいてしまいました。皆さんは自分の在る状況をどのように感じてますか？

1985年9月号　通巻75号

編集・発行　関西大学生活協同組合・組織部「書評」編集委員会
連　絡　先　吹田市千里山東3-10-1（☎388-1121〈内線4821〉or 387-9998）
頒　　価　250円